The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	矢守一彦の著作目録と地理学研究 : 地理学の潮流の中で
Author(s)	金坂, 清則
Citation	大阪大学文学部紀要. 1996, 36, p. 65-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9143
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

矢守一彦の著作目録と地理学研究

——地理学の潮流の中で——

金　坂　清　則

1　はじめに

将来の著作について幾つもの構想を抱きつつ，1992年夏，地理学者矢守一彦博士（以下，氏ないし矢守と記す）はこの世を去った。学会誌その他に掲載された氏を偲ぶ文章[1)]から我々は氏の活動についても垣間みることができる。また，氏の著作に関する書評の類い[2)]もその資料になる。だが，氏自身の膨大な著作こそは，氏の活動を顧みる際の最も基礎的な資料をなすし，その回顧は氏が活動した時代の地理学を顧みることにもなる。そして，後者の回顧が今，地理学において求められている。このことは，斯学に関係する者ならだれしもが多少とも感じていることであろう。

そこで私は，未だきっちりしたもののないその基本資料[3)]の作成の必要性を思い立った。それ故，本稿の目的は何よりもその資料—著作目録を提示することにある。だが，本誌の性格もあって，資料の整理に伴う基礎的な検討も併せ行なった。本格的な検討については他日を期したい。と同時に，本資料が広く利用されたり，本資料を活用した研究が生まれることを望むものである。また，御家族ほか幾人もの人々のご協力によってかなり正確に復原できたとは思うが，依然，見落しや誤りがあろうかと思う。それらについての御教示をあらかじめお願いしたい。では，以下，著作目録についての説明と，氏の著作活動についての検討を，地理学の潮流との関連にも留意して行なってみよう。

1)　末尾至行「矢守一彦会長の死を悼んで」人文地理45-1，1993。同「親友矢守一彦君を偲んで」史泉77，1993。同「矢守一彦教授の死を悼んで」千里地理通信28，1993。同「追憶矢守一彦君」百材29，1993。木下良「矢守一彦君の死去を悼む」歴史地理学163，1993。船越昭生「矢守一彦さんを偲ぶ」リベルス6，1992。同「矢守一彦教授の逝去を悼む」地図情報12-3，1992。同「矢守一彦教授を悼む」地理学評論66-2，1993。高橋正「追悼　矢守一彦教授」リベルス6，1992。同「追悼　矢守一彦先生」日本学報12，1993。「訃報矢守一彦名誉教授」大阪大学学報465。<友>「惜別録 矢守一彦さん」読売新聞（夕刊）1992.8.19など。日本学報と千里地理通信の上記の号および「阪大春秋」編集事務局編『阪大春秋』，「阪大春秋」編集事務局，1994には，縁（ゆかり）のある人

々による追悼文が掲載されている（134～135頁）。

2) 調査が完全ではないが，氏の著書・訳書・編著については以下のような書評や紹介がある（執筆者名や発行年，頁は略す）。『歴史地理・郷土地理』地理3-4。『蕃談（漂流の記録1)』：会員通信（歴史地理学会）30。『歴史地理』：地理12-8，会員通信（歴史地理学会）39。『都市プランの研究』：地理16-7，地理学評論44-12。『幕藩社会の地域構造』：地理16-5，人文地理23-3，会員通信（歴史地理学会）60。『城下町研究ノート』地理17-6。『城下町』：地理17-9，会員通信（歴史地理学会）66，京都新聞。『国境いの村』：地理18-3，会員通信（歴史地理学会）68。『城郭図譜主圖合結記』：月刊歴史手帖2-9。『都市図の歴史―日本編』：地理学評論48-6，歴史地理学会会報76，地理19-8，地図12-3，月刊現代1974-7，月刊古地図研究5-5，月刊エコノミスト1974-8，月刊歴史手帖2-9，學燈71-6，大百蓮華7，週刊サンケイ1974-7，朝日新聞，読売新聞，毎日新聞，サンケイ新聞，圖書新聞，東京新聞，東京タイムズ，中日新聞，日本海新聞，河北新聞，北海タイムス，北国新聞，愛媛新聞，公明新聞。『都市図の歴史―世界編』：地理20-12，歴史と地理241。『歴史の空間構造』：地理21-8。『大阪古地図物語』：地理26-3。『世界古地図』：地図19-3，地図ニュース107，地図ニュース108，史林64-6，週刊朝日3321，朝日新聞。『講座・日本の封建都市第3巻』：地理学評論55-3。『古地図と風景』：文藝春秋'85-2，地理30-4，地図ニュース149，日本歴史444，歴史地理学129。『城下町の地域構造』：出版ダイジェスト1194。『城下町のかたち』：地理33-9，地図情報8-2，地理学評論61-12，歴史地理学144。『古地図への旅』：地理37-10，學燈89-8，地図ニュース241，聖教新聞。

3) 矢守の業績については高橋正「矢守一彦先生の退官に際して」日本学報10，1991，77～78頁がまとめており，それには矢守の提供資料に基づく略歴と著作略目録が付されている。なお，私もまた氏の退官に際しての内輪のささやかな会への出席者のために『矢守一彦先生の御業績』と題する小冊子（14頁，1990）を氏のご了解を得て作成し配布した。その業績の解説の内容が簡にして要を得たものになっているのは，私の努力によるものではなく，氏がある目的のために作成せざるを得なかった文を小冊子のためにも利用することを，氏が認めて下さったためである。内容的には，氏自らの言葉による自らの仕事の総括なのである。

2 著作目録について

本著作目録は，氏自身が生前必要に応じて作成した幾つかの業績目録の下書き・コピー等を基にし，御自宅や拙宅，私の研究室，大阪大学・関西大学の各附属図書館などでの調査や，他大学附属図書館や豊中市立図書館からの図書貸し出しおよび文献複写，氏の著作の通読作業，末尾至行・浮田典良両氏の御教示，出版社や新聞社への問い合わせなどを経て作成したものである。書誌データとして最低限必要な事項を正確に押さえるためもあって，現物に当たれたものに限って掲載することとし，『観光資源総合調査報告書　史跡編』などメモ書があるだけで現物を見つけ得なかったものは省いた。[4)]

ほぼ以上のような作業によって蒐集した著作は，著書が共著8編を含めて22編，編著が共編著26編を含めて40編（うち3編は未刊），訳書が共編訳書1編を含めて2編，そして論文が書物中の分担執筆も含めて135編，その他のうち短報が82編，書評・文献解題・推薦文が

31編，口頭発表（27回）要旨が16編，事典が2編（26項目），更に地理学と直接関係のない作品が17編，自らが編集した文部省科学研究費報告書が3編というように多数にのぼる。

論文などの中にはその後著書に収録されたものも少なからずあるとはいえ，既存の作品を編集して書物にすること自体大きなエネルギーを要するわけで，旺盛な執筆活動には今更ながら驚かされる。おそらくわが国の地理学者の中でも最も多くの作品を残した人の1人であるといってよいだろう。しかも，その作品は地理学のみならず，歴史学や都市史・建築史学などの学問分野，更には，地理学者の仕事としては珍らしく，一般の読書界でも評価され，特に都市プランという概念やこれにまつわる研究は，今日盛んな建築学・都市工学からの都市史研究にも刺激を与えたし，地図史に関する研究もまたしかりであり，1970年代の古地図ブームにも深く係わっていた。従って，本目録は今後地理学のみならず隣接分野その他においても役立つと考えられる。

本著作目録は本稿の後に掲げるが，ここで，目録の形式的な事項について記しておきたい。

① まず，著書と編著については全頁数を記すと共に，共著および共編著については，当該書の下に※を付して氏自身の執筆部分の表題や頁などを記し，これに関しては，重複をさけるため，論文その他の項目に掲げることはしなかった。

② また，後に著書に収載された論文などについては，どの著書のどの部分に収められたかを当該論文などの末尾に［　］を付して記した（その際，改題や改変を伴っていることが少なくないが，この点については逐一記さなかった）。こうすることによって，氏の研究・著作活動がどう展開したかがより一層わかりやすくなる。ただ，著書が既往のどの作品を収めたり，部分的に書き下ろしたりして成り立っているのかを記すことはしなかった。

③ 次に，目録の構成については，全著作を刊行の年月順に単純配列することの利点もあり，そうすることも試みたが，ある程度分類する方がわかりやすく，利用もしやすいと考え，Ⅰ著書，Ⅱ編著，Ⅲ訳書，Ⅳ論文，Ⅴその他に大別し，Ⅴその他については，a短報，b書評・文献解題・推薦文，c口頭発表・同要旨，d事典，e文部省科学研究費報告書，f文芸に細分し，それぞれにおいて年月順に配列した（ただし，日までは考慮しなかった）。

もちろん論文と短報との区別は絶対的なものではないし，この区分が個々の作品の評価に関わるものでも全くない。短報や書評の中にもその後著書の大切な一部になっているものがあることは目録に明らかである。また，短報に分類したものの中にも文芸の項に入れた方が座りのよいものがあるが，直接的には地理学に関係のないものかどうかによって区分し，関係のないものは文芸に分類した。文部省科学研究費報告書は編著に含めてもよいが，この3編はいずれも別に掲載した著書・編著の一部や論文などの複製合刻を中心に成っているので，編著には含めず，かつ，地理学に関する著作項目の最後に配列した。

更に，氏の研究・著作活動を時の流れに沿って辿る時，初期の時代における地方史誌類

への積極的参画が目立ち，この点を浮かび上がらせるには地方史誌類を別に立項する方がよいけれども，他とは分類基準が異なるので論文の項に含めた。

④ 頁数は著書・編著のみならず氏の執筆したものの全てについて記載した。煩雑にはなるが，コピーサービス等によって文献を入手するに際しては該当頁も記さねばならないし，これを記した方が本資料の利用価値も高まるためである。また発行年月については西暦に統一して表記した。

⑤ 辞典類の中には，執筆者として名前の挙がっていないものがある。この場合は本目録から省いた。[5)]

では，以下，このような目録作成の過程で改めて感じた点も含めて，氏の著作活動について記していこう。

4) 口頭発表も研究活動を明らかにする上で大切ではあるが，ここでは著作目録に限定したこともあって他に比べて調査が十分でない。従って口頭発表・同要旨については一部に漏れがあるかもしれない。また，口頭発表や講演の内容がそのまま論文になっているものについては論文の項にのみ記した。

5) 福音館書店から刊行された織田武雄監修の『世界地名小事典』や『地理小事典』。

3 著作・研究活動の推移——地理学の潮流の中で——

1) 要約と記述の方針

氏の著作を通覧する時，何よりも痛感されるのは，研究テーマの一貫性であり，研究の進展の速さとその方向の先進性・妥当性，成果の大きさであり，また研究活動を後になるほど自らの研究テーマに集中させていった点であり，更には，論文などを筋道立てて編成し一書にまとめていくその速さである。歴史学者，特に原田伴彦との共同の仕事＝共編著の多さとそれを通じての都市史研究の第一人者の１人としての貢献も明瞭である。また，いわゆる大手出版社からの著書・編著の刊行を通じての研究成果の一般社会への紹介・還元という点でも地理学者では抜きん出た１人であった。20を超える学術誌・総合誌や新聞で紹介され，[6)] 称賛され，東京日本橋の丸善では週間ベストセラーにさえなった[7)]『都市図の歴史—日本編』（後掲の著作目録中の著書13。矢守の業績は以下すべてこの目録により，著書13というように記す）などは，研究史上の問題点を鋭く見抜き，新しいテーマを体系的に論じる能力のみならず，時代や社会が求めているものをいち早く形にする氏の非凡なセンスと資質を物語っている。そしてこのような特徴を有しての研究活動を通じて次々と生み出していった研究成果が，歴史地理学や地図史などの研究の発展を先導し，隣接分野からの研究にも影響したのである。

では以下，以上の要約を敷衍する形で述べてみよう——こうすることによって，氏の研究

が戦後の日本の人文地理学の動向と密接に連動していたことや，人文地理学における京都学派の人々によって開拓されてきた仕事をきっちりと踏まえて発展させ，独自のものを生み出したことも多少明らかにできるかと思う。

その際，1970年に相次いで出版された『都市プランの研究』［著書８］と『幕藩社会の地域構造』［著書９］が，学生時代以来一貫して追求してきたテーマを総括するものであったと同時に，この二著の刊行を機に氏が研究テーマをはっきりと変えたこと，すなわち，後者のテーマから退くと共に，前者のテーマの解明に際して用いた資料としての古地図そのものに関する研究を，最初は都市プラン研究との関連に留意しつつ，そして次第に都市図から他の類型の古地図にも広げつつ展開していき地図史研究として確立したこと，しかも，このようないわば資料論・テキスト研究を旅行記や地誌・名所図会などの地図以外のジャンルの作品にも広げることも通じて，いわゆる人文主義地理学（ヒューマニステイックジオグラフイー）的な研究も展開したことに留意し，以下，氏の研究・著作活動を振り返るに当たっては，学位請求論文およびその副論文となった上記２つの書物の刊行まで―前期と，それ以後―後期に分けて見ることにしたい。

2）学位論文の刊行まで―前期（1952～1970年）

２つの故郷（ふるさと）　地理学を学ぶ者が，大学において斯学を修めた証として書く卒業論文のテーマを最も馴染みある場所である故郷にしばしば求める[8]ように，矢守もまた故郷にその題材を求めた。卒業の２年後の『人文地理』に掲載された浜縮緬の流通機構に関する論文［論文２］がそれである。また，その１年前の『史林』に発表した彦根城下町の人口構成・居住地構造に関する研究［論文１］もそうである。

1927年に朝鮮大邱府随一の繁華街[9]で楽器と食器・食品の卸・小売を営む商家に生まれた少年矢守にとって，「ほぼ隔年毎に父母に連れられて朝鮮海峡を渡つ」て訪れる父母の出身地滋賀県東浅井郡の地は，「所詮，私の帰るべき里は生れ故郷朝鮮である」ことを実感する所であった。だが，敗戦を京城帝国大学予科生としてソウル（京城）でむかえ（後掲の「略年譜」参照），「この北鮮の一隅で死ぬだろう事を覚悟した」後，「大邱に帰り着」き，更に，破壊され地下室だけの残った住処を後に，母や従妹と共に貨物船で釜山港を脱出し母の実家のあった東浅井郡の寺に辿り着いた[10]時，18歳の多感・聡明な矢守には，もう１つの故郷が，「祖国」の父母の「郷国」に，それまでとは違った意味をもって誕生した。

矢守が京都大学文学部在学中に発表した小説「朝鮮海峡」［文芸１］は，第１回滋賀県文芸コンクール創作部門の一等入選作品となったものであるが，この自伝的小説には矢守の生きた世界が映像を見るがごとくに描かれている[11]。と同時に，故郷というものに対する氏の想いの源泉をみることができる。また，ブラーシュの『人文地理学原理』の海に関する一節を全体を貫く命題として引用して始まり，またその後２回にわたってのブラーシュの記述や

「風景の総体的印象」・「風景画」・「心象」・「方向感覚」・「記憶の中に埋れている，或る景色」（ブラーシュ）といった表現を的確に組み込んだこの小説には，これが矢守の地理学と無縁のものではないことと，後年の人文主義地理学への矢守の関心の源とも言ってもよいものがあることをみて取れる――ちょうど人文主義地理学の源をブラーシュにも求めうるように。そして，故郷というものへの関心や想いが，氏の初期の地理学研究をみる上でも無視できないようにも思われる。[12)]

氏が1962年に発表した朝鮮の都城プランの類型・系譜や城邑の分布・規模を扱った研究［論文24，25］を行なったのは，既に城下町プランという概念を掲げて城下町の地域構造を個別事例のレベルを超えて解明する途を拓いていた氏が，この概念を日本以外にも適用して理論の充実を図ろうとしたからであるし，この研究は後によりグローバルな観点から都市プランを体系化した段階（［著書８］）では，「都市囲郭の変容系列」の一般論を受けての特論として位置づけられることにもなるのだが，次の２点も否定できまい。すなわち，朝鮮の都城・城邑の研究の動機・背景として，誕生以来18年間をこの地で暮らし，この地の歴史や地理・考古に親しんでいたこともあって，土地勘と知識を有しているという事実と，「帰るべき里」だと考えたことさえあった故郷を研究対象にするという意識があったことである。1958年に出た朝鮮の歴史地理に関する考察［論文８］は，上の「事実」を踏まえてなされたものであり，その成果は上記の論文25にも生かされている。

幕藩社会の地域構造に関する研究の推移　以上，矢守の研究の特に初期においては，幼少の時以来強く意識せざるを得なかった故郷というものに留意する必要のあることを述べたが，自らに最も関わりのある場所としての故郷への関心だけが拠り所になって研究の対象地域が定められたわけでは勿論ない。最新の学問研究の成果に立脚した，日本全体を視野に入れた考察が行なわれていることは上記した論文２において既に明白である。それ故，この論文の成果は，商品流通の歴史地理の方法論を扱った論文［論文７］にも生かされた。

そして，故郷を対象とした近世日本の歴史地理学的研究は，大学院時代（1953～58年，「略年譜」参照）の研究の１つの柱として続行され，しかも，一層隣接分野にも目配りし，歴史学の世界に踏み込む形で行なわれた。それまで専ら近世史家のみが論究していた地方知行を切り口として，大名領国を歴史地理学の立場から論じるという斬新さが目立つ論文９は，その具体的な成果の１つである。そして，このような故郷に関する地理学的研究は，1957年から始まった『彦根市史』編纂事業に当初から参画したことによっても促進され，著作目録では論文19・26・31としてそれぞれ一括した諸論考を生んだが，そのうち近世の陸運と彦根城下の人口に関する歴史地理学的考察［論文19，19・26］は，論文９や論文１・２・22と共に，後に幕藩社会の地域構造に関する著書［著書９］の中で位置づけられた。

勿論，既に大学院時代において，幕藩社会に関する歴史地理学的研究は，故郷以外を対象としても進められた。すなわち，論文１・２によって近世歴史地理学の専門家となった矢守は，共同調査を積極的に推進する中で歴史地理学の進展，地理学の再生を図ろうとしていた藤岡謙二郎を中心とする歴史地理学的共同研究において土地開発，藩政村，更には藩領の規模との関係からみた城下町の規模といった問題を扱い，その過程で，テーマ的にも地域的にも自らの近世歴史地理研究に幅と厚みを与えた。論文12・13・14がその成果である。そして，同種の研究は，1958年４月の名古屋大学への赴任（「略年譜」参照）後も，『明智町誌』や『春日井市史』の編纂に携わる中で進められて論文20や論文30を生み，更には1962年４月の大阪大学への転任（「略年譜」参照）後にも持続して論文35・37・41・70を生んだ。

ただ，論文37が地方知行を論じた論文９に通じるものであり，藩政村や開発を論じた論文41のテーマも同12・13・30で既に扱ったものであることからわかるように，テーマ的には，名古屋大学時代，更に言えば大学院時代にほぼ出揃っており，大阪大学に移った段階における，以上の研究に関する矢守の関心は，これらを，幕藩社会の地域構造という観点から総括することにあった（主なテーマは都市プランの方に移っていた）。

幕藩社会の地域構造に関する研究の総括について　このために書いたのが上記の論文35を補充した著書９の総説第一及び，相関連する内容をもつ総説第二の２論文[13]であり，前者にあっては，幕藩体制下の日本や「強力な政治的地域的フレームワークをなしていた」藩領の，政治や経済にみる空間秩序としての地域構造が，主として歴史学の成果を地理学者の目でアレンジすることによって論じられた。他方，第二論文［論文70］にあっては，やはり主として歴史学における，地域区分を含む地域的な問題に関する研究の成果が，地理学の側に一日の長のある地域概念＝地域の考え方に基づいて再構成され，階層性をもって存在する結節地域の構造（地域構造）を機能主義的地域論に基づいて解明することの必要性，そこに歴史地理学の主体性のあることが指摘された。

そしてこの両論文は，戦後の地理学の最重要概念となっていった地域ないし地域構造[14]をめぐって，日本の近世について，特定のテーマないし個別事例研究を超え，初めて包括的に論じた点において，歴史地理学の１つの到達点を示すものであった。と同時に，幕藩体制史に関する既往の重要論文を集大成した『論集幕藩体制史』中の『幕藩体制論・国家論』（1993年）に第一論文が収録されたことに示されるように，歴史学からも評価されるものであった。それは，地域に関する最新の考え方であった機能主義的地域論の観点から歴史学の成果や歴史学における地域に関する考え方を批判的に整理・再編成したことが，やはり地域というものに対する関心の高まりのみられた当時の歴史学からみても新鮮であったためである。

だが，このような総括を行なった段階で，矢守は，この研究テーマから離れる。その理由

について氏は『幕藩社会の地域構造』［著書９］をまとめ終えた段階で，次のように吐露している。

「環境論的な分析を専らとし，歴史学研究の補助手段と見做されていた」かつての歴史地理学と異なり，「地域論的アプローチとして多少とも新しい提言を含むものと，ひそかに思ってもみた，――しかし歴史時代についての地域論的考察などと云いじょう，なにがなし史学の＜猿真似＞の感は拭い得ぬような具合である。せっかく地理学を専攻したからには，今後はたとえば，自然環境との関わりにおける技術史的な検討，景観復原，町絵図の地図学的研究などに進むことにしようと思いたった[15]」と。

新しいテーマに対する情熱と決意が裏返しになってのやや自虐的な評価とはいえ，当時の矢守の率直な心情であったとみてよいであろう。

そして，この方向転換は，その後矢守が生み出した成果の大きさを思う時，矢守個人として「正解」であったのは勿論のこと，地理学にとっても一面においては有意なものであったと言える。ただその反面，幕藩社会の地域構造という命題に関わる研究が以後さしたる進展をみぬまま今日に至っている点は，残念なことと言わざるをえない。そして，このような命題に関わる研究が必然的に歴史学の＜猿真似＞になるのか＜猿真似＞を超えることができるのかは，この命題が近世日本に関する歴史地理学研究の柱をなすとみられるだけになお検討すべき事柄であるし，歴史地理学と歴史学との関係や歴史地理学の存在意義について考える上でも興味深い。そこで，もう１つの研究テーマである都市プランの研究の検討に移る前に，矢守の総括と方向転換について，今一度，次のような整理を行なっておきたい。

近世日本の歴史地理学の課題を幕藩社会の地域構造の解明におき，そのために，藩領を最も重要な地域的単元・空間的枠組みと捉え，そのいわば地域的細胞ともいうべき藩政村やその核としての城下町の空間構成や相互の結びつき，更には結びつきを具体的に示す商品流通や地方知行について論じるという論理と総括（上記「総説第一」）の仕方は，戦後の地理学の理論的発展を正面から受けとめたもの，すなわち，特に水津一朗[16]によって提起された機能主義的地域論ないし結節地域的地域論に立脚し，それを日本近世という時代について実証的に論じたものであった。ところが，1)個々の問題についていずれも新たな知見を提示し，全体としても筋道の通ったものであり，特に第二論文（「総説第二」）では歴史地理学の主体性が示されたと判断されるにもかかわらず，また，2)西村睦男ほか同窓の人々との共同研究［論文37所収の書物］によって藩領の歴史地理学研究の意義が証明されたり，その１人でもある山澄元により近世村落についての研究が深められるといった展開がみられ，氏自身山澄の研究の意義をはっきりと認めていた［短報53，書評18参照］にもかかわらず，3)幕藩社会の地域構造論として総括する段階において，歴史学の＜猿真似＞という感を拭い得ないとし，そのような歴史学に対する従属性という問題の生じないテーマ，近世歴史地理学の独自性な

いし矢守の独創性をより発揮できるテーマに方向転換することを決意したのである。

都市プランの研究　最初の学術論文［論文１］が上記のように彦根城下町を対象としたものであったように，氏の城下町に対する関心は早くからあった。また，この論文は，副題や後に著書９に収載されたことからもわかるように，幕藩社会の地域構造として結実する方向での研究であり，城下町プランを正面から扱ったものではないとはいえ，人口・居住という側面から城下町域の内部構造をみたその内容には都市プランに係わる点も少なくない。

ただ，城下町プランという概念を提起することによって，都市プラン研究の出発点とした論文［論文10］が発表されたのはこれから約４年後，大学院修了直前であった。

専攻を考古学から地理学に変更して研究活動を開始した頃の氏には，近世史学の問題に歴史地理学の側から接近したいという意識が強く，城下町プランの研究も，単なる形態論ではなく，歴史的文脈において問題にできる点に着目することから出発している。すなわち，城下町の成立時期が一様でないと共に，同じ城下町でも時期によって近世城下町プランが異なり変容するという２つの事実に，それが藩構造の差異や幕藩体制の変質過程の反映であるとみて注目し，この点に留意するとき，近世城下町プランに戦国期型・総郭型・内町外町型・郭内専士（町屋郭外）型・開放型という５つの類型が認められ，それぞれに卓越した時期があって発展系列として捉えられるという仮説を提示できると考えたのである［論文10］。この説が，今日，都市や城下町の歴史地理を扱う際に最もよく紹介されて[17]定説として定着し，歴史学の分野でも受け入れられている[18]ことは言うまでもないが，この着想に関連して次の３つの事実を指摘しておくのがよいであろう。

その１つは，内外の成果や発想法にヒントを得る一方で，後に詳細な解説を出版する［編著１］ことになる「主圖合結記」をはじめとする城下絵図を多数繙き[19]（ひもと），比較検討するという基礎作業を土台にしているということ，２つ目は，城下絵図が最初学ぼうとした考古学の遺物にも当たるものとして関心をそそったのに加えて，矢守を考古学から地理学に導いてくれた恩師織田武雄を中心として行なわれた国際地理学会議地域会議の地図展示作業に参加することによって古地図に対する関心と基礎を培われた[20]ということである。そして３つ目は，矢守にとって最も重要なこの論文がそれにとどまるものではなく，翌年に発表された，城下町の町割や屋敷割についてのこれまた体系的な考察［論文15］と併さる，内容豊かなものであったことであり，この２つの論文によって城下町の歴史地理学的研究は新たな地平を切り開かれたのである。

それ故，ここから，城下町プランにおける「地域制」の近代における変容［論文23］や，地域制と微地形との関係や侍屋敷地区・町屋地区の面積構成比［論文29］に論を展開することは矢守にとっては容易なことであったと思われる。そして論文23に関連するものとして，

旧城下町における伝統産業の立地という経済地理学的な問題にも展開する［論文36］ことによって，日本の城下町を対象とした『都市プランの研究』の後半（第２編）は1967年の時点で既に完成した。

また，その一方で，ヨーロッパの中世都市を対象として，機能論を踏まえた新しい都市形態論としての都市プランの研究の意義や目的，方法論，その一部としての都市図の活用の有効性について先行研究の検討を通して論じる［論文34］ことによって，都市プラン研究の方法論を確立した。そして，シュヴァルツ（G. Schwarz）の業績の紹介［書評９］以後集中的にヨーロッパの歴史的都市に関する紹介を行なったり［書評10～12］，それ以前に，上記した朝鮮の都城や城邑に関する研究［論文24・25］を行なって，研究をグローバルな視座からのものへと展開する方向を示し，論文38と39によって都市囲郭という観点からこれを実現した。更に，都市プランの研究の最も盛んなドイツでの半年間の研究（「略年譜」参照）をも生かす形で論文40を出し，また，ドイツ中世都市の空間構成の特質を歴史的核から明らかにした研究を口頭発表［口頭発表要旨11］したり，ドイツ中世都市の各種街路の「腑分け」についての成果共々，著書の中に組み込むことによって，『都市プランの研究』は完成した。その第１編を構成する章の発表期間は５年にすぎない[21]。凄まじいばかりの集中力である。この研究を展開させる形で新しいテーマに一刻も早く着手したいという氏の情熱が今更ながら伝わってくるようである。

その他の研究・著作活動　以上，学位論文とその副論文として結実した研究・著作活動について振り返ったが，この時期の氏は，この他，歴史地理の概説書［著書３・６］，同論文［論文11・28・32］や，地誌［著書４，論文５・６・８・14・16・17・27］，政治・経済地理［論文３・４］，地名事典［事典１］を織田・藤岡ら主に同窓の人々と共同で執筆したり，人文地理学の教本を執筆したり［著書１・２］，あるいは幾つもの著書や論文の紹介を行なったり［短報１，書評・文献解題１～14］，歴史地理学の動向を整理したり［論文33，短報２・７・９・17・19］といったように，地理学の世界や一般社会に向けてのエッセイを含む多数の啓蒙的な作品の執筆も行なったが，歴史地理や地誌・経済地理・自然・村絵図［著書５］などの分野を担当する形での地方史誌類の編纂に大きな労力を割いたことも特筆されねばならない。それは，この種の仕事が地名事（辞）典類の執筆と共に，当然のことながら今日においても地理学研究者の１つの一般的な仕事になっているのと対照的に，矢守はこの時期以後は，この種の仕事を一挙にしなくなったからである。地方史誌類に執筆したことを，上記した自らの２つの研究テーマに生かせた場合もありはしたが，そうではない，自らにとってはその場限りの仕事となることがわかっている項目もしばしば分担しなければならなかった［論文19・21・31］ことを負担に感じていた矢守は，大阪大学への転任によって義務的とも言える

この種の仕事から解き放たれる状況を迎えるや，独創性を発揮できる「研究」へと邁進したのである。

以上のようにみるとき，自らの研究に係わるものとして，城下町研究を展望した論文［論文18］と，同じく城下町プランに関する英語論文［論文42］，そして，氏が，織田と共に師と仰いでいた室賀信夫との共編訳書［訳書1］，さらには子供向けの書物ではあるが，同じく探険を地図と結びつけて著した著書7があることを忘れてはならない。訳書1や著書7のテーマはその後，はっきりと研究テーマになっていくものであった。

3）学位論文の刊行後一後期（1971～1992年）

未刊の業績　学位論文刊行後の仕事について検討するに当たっては，まず，矢守の著作・研究活動の成果が，すべて出尽くしたわけではなく，将来，2編，実質的には3編もの編著［編著31・32・33］が出ることに注目しておきたい。特に，氏が朝鮮から帰還後，第四高等学校に入学して以来親しみ，特に城下町研究・城下絵図研究を研究の主軸に据える中で関心を抱き続け，論文81・82や編著9などの成果を残している金沢についての，城下絵図・城下町研究［編著32］は，人文地理学会の特別例会（於，熊本大学）で口頭発表した［口頭発表要旨24］だけの，晩年の新しい視点からの未発表原稿を含むこともあって，一層刊行が待たれる。

また，編著33は，古地図の復刻で知られる出版社が，『都市図の歴史—世界編』［著書14］やブリッカー（C. Bricker）の大著 *"Landmarks of Mapmaking"* の翻訳［訳書2］あるいは論文75・101・103その他の業績によってヨーロッパの古版都市図についてもわが国の第一人者と評価されていた氏を編者に迎え，30周年記念出版事業の一部として刊行する予定であったものであり，出版社では，生前に氏が明示していた構想や選定していた図をベースとし，氏の編著として出版すべく計画を進めている。

更に，担当した図の解説を行なうまでには至らず，近世の大坂に関する2枚の大判の歴史地図——図4近世大坂の所領配置と図5天保期の大坂三郷——を作成する[22]にとどまったが，また，公式には新修大阪市史編纂委員会編ということになるが，編著31も氏の編著の1冊に加えられてもよいものである。すなわち，『新修大阪市史』第10巻「歴史地図」は，地理学者では唯一の編纂委員会委員[23]であった氏を中心として編纂事業が進められ，自然環境および古墳時代から現代に至る大阪の歴史をA1判の11枚の地図によって描き表し，各図ごとの解説を付すという構成その他については氏の生前中に決定された。近く刊行されるその成果は，大阪の歴史については膨大な研究の蓄積があるにもかかわらず，詳細な歴史地図が欠落している現状からして貴重なものになると期待される。と同時に，大阪は，大阪大学に永らく（28年間）勤務したこともあって氏が最も深い関わりをもった都市であり，複数の著書［著

書13・18・19・22]，編著［編著11・13・19］や多くの論文［論文36・62・69・80・104・112・113・117・120・123・126]，その他［短報42～44・50・55・72，推薦文15・24，口頭発表要旨16・19］を大阪に関わって著してきたが故に，この編著31は――氏の同窓あるいは長年にわたって関わりをもってきた人々との共同の仕事ではあるが――，氏の大阪研究の最後の作品にふさわしいものとしても位置づけられるであろう。

このように，氏は逝去してなお，新しい研究成果を世に問わんとしているわけであるが，実質的な研究は言うまでもなく1992年の夏に終わった。学位論文の刊行後21年余が経過している。最初の作品を発表して以後学位論文の刊行までが18年だから，ほぼそれに等しい年月である。そこで，以下，この21年間の著作・研究活動について振り返ってみよう。

都市史研究と都市図研究―後期第1期　学位論文刊行後の矢守の著作活動は，それまでの研究に直接関係する作品を，個人としてまた編者・共著者として発表する一方で，上記した，都市図を中心とする古地図や地図史に係わる新しいテーマについての作品をこれまた個人としてのみならず編者・共著者として発表し，この分野の研究の進展と社会への成果の還元に寄与するものであった，と要約できる。そして，このような要約は以下のように敷衍できる。

すなわち，学位論文をまとめた後の氏はまず，城下町プラン研究を進める過程で収集した城下町関係文献を，旧稿［論文18］で扱った1950年代までの研究以降のものについて整理する作業を集中的に行なった。『人文地理』に載った論文43と10カ月にわたって『地理』に連載された論文10編のうち論文50・52・55を除く7編［論文44・45・47・48・51・53・54］がその成果であり，連載完結の4カ月後の1972年4月には早くも，上記旧稿や論文52・55，そして中部地方の旧城下町等の都市発達を扱った作品［論文71参照］を併せて一書にまとめた。氏にとっては元来は研究の副産物であったものを作品化したことになる本書［著書10］は，城下町の特に地域論的な問題に関する1970年代以前の文献が隣接分野に及んで広く拾いあげられ，しかも，鋭い寸評が個々に加えられつつ研究史が体系化されているために格好の手引書になっている。

その一方で氏は，同じ年に著書11と12をも書き下ろし，前者では，城下町プランという視角から城下町を捉える立場の意義の証明と定着を図り，後者では，名古屋大学時代のフィールドでの近世歴史地理研究の成果の一端を天竜・奥三河の村について披露した。「日本の歴史地理シリーズ」中のこの二書は，一般読書界に向けて研究成果を水準を落とさずにわかりやすく伝えるという，これ以後の氏の著作活動の顕著な一面を特徴づける最初の作品であった。と同時に，著書11は，都市史研究から都市図研究へという研究テーマの変更のプログラムがさらりとではあるが既に示されている点で注目される。

そして，年が1973年に改まって以後は，新しいテーマである都市図の歴史地理学や地図史

に関する成果を次々と発表し［論文57・58・60・61・63・64・67，編著1］，翌1974年5月には早くも，論文65・66のような新稿や著書8の成果も生かして『都市図の歴史―日本編』［著書13］として取り纒めた。加えて，この約1年後には，一部（第二部「都市プランの歴史」）は著書8を下敷きにしつつも殆ど書き下ろしの形で『都市図の歴史―世界編』［著書14］を出版した。

著書8の基軸が「都市のヴィジュアルな空間構成」としての都市プランの解明にあったのに対して，著書13と14では，この解明にとって不可欠な資料である都市図に基軸を置き，これ自体をさまざまな素材と観点から体系的に論じた上で，都市プランと都市図とを見事に融合させている。しかも，著書8では日本の都市については城下町に対象が限定されていたのに対し，著書13では，古代宮都，特にその最終作品としての平安京と以後の都市構造の変容も扱うことによって城下町プランから都市プランへの展開を実現している。また，「経世論の城下町プラン」といった論点（元，論文56）を提示して江戸時代の思想との関わりにおいて城下町の立地や城下町プランを論じることにより，城下町プラン研究自体をも進めている。更には，近世都市についても三都や港町・門前町・寺内町に対象を広げ，三都の都市図を中心に詳細な検討を加え，それを踏まえて都市プランを論じもしている。

このような，日本の都市に関する都市プランと都市図の歴史の全体像を両者を統合する形で明らかにする試みは，従来の都市の歴史地理学（都市史）研究と地図史研究のそれぞれの問題点の核心を突き，研究の空白部分を埋める，「新しい地平を拓く」ものであった。その上，社会におけるわが国の都市の歴史や古地図への関心の高まりをも視野に収めたものでもあった。多数の古地図（絵図）や写真を――著書14では古地図と深い関係にある絵画までも――四六判の中にちりばめるというアイディアも，時に細部を捉えにくいもどかしさはあるものの，斬新だった。なにしろ，その5年前に出た『日本の古地図』[24]や2年前と1年前に出た『日本の市街古図』全2巻[25]，また直後に出た『日本古地図大成』[26]などの豪華本によって，古地図の魅力を知ったり，たとえ以前から知っていても実際にしかも多数のものを一度に味わうことが容易でなかったのが可能になったりしたものの，手軽に味わうことはなお至難であったのが，本書によって漸く可能になり，しかもより体系的な考察の下での説明つきで味わえるようになったのである。

かくして，地理学の他，地図学や歴史学・建築史などの分野からも高い評価を得た[27]のみならず，11もの雑誌や14もの新聞で取り上げられたり，前述のごとく東京日本橋の丸善では一時ベストセラーの仲間入りまでし，3刷まで出版され，部数は2万部にのぼった。500頁に近い大著である上に，いくら達意の文章と軽妙な筆致で書かれているとはいえ内容的には文学作品などのようには読み進みにくい書物であるにもかかわらず，である。それだけの魅力を備えていたのである。その上，氏の研究対象は，世界の都市プランと都市図にまで及んだ

のである。そして，一般読者の関心を引き付けるという点では著書13ほどではなかったが，斬新さという点ではこの著書14は，日本を扱った著書13に優るとも劣らなかった。上記のアイディアを最初に具体化し，本書同様の高い評価を各界から得，「学界のみならず，ひろい読者層に地図史への関心を喚起し[28]」古地図ブームを招来した織田武雄の名著『地図の歴史[29]』でも世界の都市図は取り上げられていなかったのである。

それ故，氏はこの2冊のパイオニア的著作によって，わが国における都市史研究と都市図研究の第一人者の仲間入りを果たした。そして，以後はその地位にふさわしい活動を活発に展開していった。その意味で，この2冊の大著も，著書8・9同様，氏の研究・著作活動における画期をなすものであった。そこで，次に，学位論文刊行後（後期）の第2期と第3期についてみていくが，その前に，以下の4点を確認しておきたい。

その1つは，氏の都市図の地図史的研究の端緒をなした米沢城下絵図に関する論文［論文58］はのち『日本古文書学論集1　近世Ⅰ』に収められたことが示すように，歴史学からも評価されるものであったことと，既に大学院時代に出会った「主図合結記」の，蓬左文庫本の復刻に際しての詳細な書誌学的研究［編著1］は，地図史研究者としての矢守の存在と力量を論文58にもまして示すものであった，ということである。

また第2は，古地図・地図史研究は，氏の恩師であった織田武雄や室賀信夫[30]らによって促進され，海野一隆・船越昭生・高橋正らも加わって京都大学地理学教室出身者の特色ある研究分野となっていったものであるが，矢守の場合には，都市プラン研究との関わりから都市図研究に進み，そのため両者の問題点を突くと共に両者を融合ないし統合しようとした点，しかも，ヨーロッパ特にドイツにおける研究をきっちりと踏まえていた点に特色があり，ここに新しさがあった，ということである。そして著書13と14の執筆自体が織田・室賀の推挙によるものであったし，織田の上記名著を受ける形になっていた。いわばその姉妹編であった。そして船越の『北方図の歴史』（1976）へと続くものでもあった。また，他方，都市の歴史地理というテーマは藤岡謙二郎の研究テーマに重なり，足利健亮らのそれにも続いていくものであった。というわけで，人文地理学の広範な研究分野からみる時，矢守の研究は，明らかにこのような京都大学地理学教室出身者の研究の流れの中に位置するものであったということになる。

そしてこのような周知の事実と共に指摘しておきたいのは，次の2点である。

その1つは矢守自身に関わることである。すなわち，都市プランの研究にとって都市図自体の研究が不可欠であったが故にこの研究へと進んだのは当然であったし，『彦根市史』の編纂や国際地理学会議の地図展示に関わって古地図に接する機会が得られたことが古地図研究の契機としてあったことも事実であるが，それと共に，大学入学当初志望していた考古学で扱う遺物に対するような愛着を古地図に対して感じ，埋もれた具体的な「もの」を発掘し，

調べ，そこから新しい事実を発見して論を展開することの面白さに惹かれたこと，しかも，このような研究こそが，地理学者としての自らの独自性[31]と存在感を学問研究の世界に対してのみならず社会に対してもアピールし，かつ，そのような研究成果に対する要望ないし需要が社会にあることを見抜いていたという点である。後期第1期の著書・編著・論文中，都市図と都市史に関係ない作品はわずかに著書12だけであり，論文46でも勿論城下町の立地やプランを取り上げている。

また，今1つは，原田伴彦・豊田武や経済史の宮本又次を含む大阪大学の歴史学研究者，つまり地理学以外の人々との交流の中で，その独自の研究領域を開拓していったという点である。

都市史・都市図研究の第一人者としての編纂活動—後期第2・第3期　そして，この最後の点，とりわけ歴史畑の都市史研究の第一人者であり，歴史地理学的問題についても造詣が深く［論文111参照］，『人文地理』（8-6）にも都市景観の変容に関する論文を投稿したことのある原田との共同活動は，重要であった。都市史・都市図研究の第一人者としての編纂活動の多くを，時に建築史の西川幸治や日本史の豊田武・児玉幸多・森谷尅久らが加わりつつ，原田と共に進めることになったからである。

その最初のものは，1975年から77年にかけて出版され，本格的資料集としての評価を得た『日本都市生活史料集成』全10巻[32]［編著2］であり，その後，『日本の市街古図』のいわば改訂版として出版された『近畿の市街古図』［編著13］・『中部の市街古図』［編著15］・『中国・四国の市街古図』［編著16］や，日本の封建都市を様々な分野から取り上げた点で評価される『講座・日本の封建都市』全3巻［編著17・20・23］，あるいは古地図の魅力を廉価で味わえることを可能にした『日本の古地図』全12巻のうちの第11巻や，大判の複製図に特色のある『日本城下町絵圖集』全6巻中4巻［編著19・22・24・25］，また「主図合結記」（前述）と同種の城絵図の図叢であり新旧のものが揃う点で注目される浅野文庫所蔵の城絵図のうちの新しい方を複製・解説した『浅野文庫蔵諸国当城之図』［編著21］などが，原田が世を去る1983年まで相次いで出版されていった。

更に，この間の1977年に出た『日本国尽（江戸時代図誌　別巻1）』［編著12］の編著にも原田らと共に入っているが，これまた注目される。それは，本書で「幕府撰国絵図と板行国絵図」を扱い，その直前に出た単編著『山陰道（江戸時代図誌　第19巻）』でも城下絵図の他に日本総図や国絵図などを扱ったのをきっかけとして，以後矢守が，都市図以外のジャンルにも対象を広げていったからである。

勿論，氏の古地図研究の中心は城下絵図を含む都市図にあった。そして，『日本の古地図』全12巻中，大坂を扱った第11巻（上述）の他にも，京都を扱った第4・10巻［編著5・8］

と中国地方の城下町を扱った第5巻［編著6］，金沢・名古屋を扱った第12巻［編著9］を単独ないし大塚隆との共同で編纂してこの企画の中核を担ったほか，1981年には前述の編著21に先立って『浅野文庫蔵諸国古城之図』［編著18］を単編著として出し，86年には，城下絵図の白眉であり，近世絵図史上大変重要な「正保城絵図」の復刻本を監修してその概説を執筆した［編著26・27］。

これらのうち，氏が『日本の古地図』シリーズの中核を担ったのは，これが同じ書肆から出版され好評を博した著書13と対をなす企画であった[33]からであり，『日本の市街古図』では歴史学の原田と建築史の西川の両名であった編者に，『近畿の市街古図』・『中部の市街古図』・『中国・四国の市街古図』では矢守が加わったのは，この間に著書13・14など氏の目覚ましい成果が世に送り出されたからである。

また，以上の他にも，氏は，主に歴史地理研究者が参画して成った『生きている近世』全3巻において『城と城下町』［編著14］を藤本利治と共編したり，日本城郭史研究叢書の1冊として刊行された『城下町の地域構造』［編著28］を歴史地理学と歴史学の論考を中心に編纂するなど，都市史研究の分野についても第一人者としての編纂活動を担っていった。

このように，氏は著書13を刊行して以後1987年までの14年間に，未だ触れていない編著4と29を含め，実に36編もの編著を世に送り出したが，編著1の出版も著書13のわずか2カ月前であることからすると，全ての編著が著書13と同時かそれ以降のものということになる。かくして，著書13の出版が，氏の著作活動の展開の中で，著書8・9と共に重要な画期をなすものであったことが改めて痛感される。

尤も，これら36編のうち，編著2の全10巻中，四［編著3］と八［編著7］を除く8巻や編著13・16・19・22・23・24・25にあっては，矢守自身の執筆は殆どないし全くないが，見方を変えれば，このような形で編者になっていることも，都市史・都市図・地図史研究の第一人者としての氏の存在の大きさの証である。そして，これまた勿論のことながら，氏はより大きなエネルギーを，以上振り返った編著以外の著書や論文などの執筆に振り向ける中で，都市史や都市図を中心とする地図史研究の第一人者としての仕事を進めたり，それを更に展開する方向での人文地理学の新しい潮流に沿った仕事をも進めていったのである。

そこで次に，これらについて振り返ってみよう。前期と後期の間や後期の第1期と第2期の間とは違って必ずしも明瞭ではないものの，1977年ないし1980年代以降を後期の第3期として区分しうることにも触れることになろう。

著書13・14刊行後—後期第2・第3期の著作活動　著書14刊行後の氏には，著書13と14の間の論文1編［論文68］を含め，67編の論文と8編の著書（共著3編を含む），48編の短報などがある。そしてこれらはテーマによって，城下絵図に関するもの，城下町に関するもの，

各種の古地図・名所図会・旅行記やそれらの作成者・著者に関するもの，更には大阪に関するもの等々に分類でき，かつそれぞれが更に幾つかに細分される。城下絵図に関するものからみていこう。

＜城下絵図に関する４つのテーマ＞

その１つは，米沢を事例とした論文58（上掲）によって始まった個別城下町の城下絵図史研究であり，それぞれ福井，金沢，高松と姫路，熊本の場合を取り上げた論文77・82・114・125の４つがある。これに対し２つ目は，幕用図・藩用図という区分に基づきそれぞれの中で個々の城下絵図を比較するものであり，論文85が幕用図，論文99が藩用図を扱う。

このうち前者の個別城下絵図史研究は，著書13において，「＜未開拓の領域＞として残されている……わが国における都市図の歴史の解明にとってゆるがせにはできない[34]」として注目したテーマである。また後者は，城下絵図史研究に必要な絵図の分類と分類した範疇の中での個々の城下絵図の比較という問題に関するものであり，これも前者のいわばタテの比較に対するヨコの比較[35]として論点になることを著書13で指摘している。このようにこの２種類の研究は，著書13で提起した課題を自ら展開していったものと位置づけられる。なお，そこで氏はタテ・ヨコそれぞれの比較研究の後には「これらの総合的な対比考察」に進むべきであろうとしている[36]が，この検討は実現しなかった。

ただ，その反面，絵図の作成過程といった，城下絵図の地図史的研究としては不可欠な斬新なテーマについての手堅い実証研究［論文81］や，次の項目の最後に掲げる，旅行記とそこでの「主図合結記」の記述を関わらせて論じた研究［論文72］に着手している――そしてこのような地図史研究の多面的展開は，城下絵図以外をも対象とする中で果たされていく（後述）。

なお，上記した３つとはテーマの意味合いがやや異なるが，編著20中の論考では，城下絵図の複製の数々や城下絵図およびこれに即しての城下町プランに関する既往の研究を総覧している。著書10の一種の続編をなす。また，短報36は，後期第２期段階での城下絵図史研究の幾つかの課題を手際よく示し，論文88では城下絵図と都市の鳥瞰図について概観している。

＜城下町研究７種＞

次に城下町についても，視点ないし論点を後期第１期よりも多様にしつつ研究を継続していく。

その１つは，それぞれ近畿・山陰道・中央山地帯の城下町を対象とした，城下町プランの５類型という視点からの事例紹介［論文70・74・76］と概説［論文78］であり，このうち論文74と76は定説となっている自説を一般読者に向けて紹介するもので，『探訪　日本の城』という企画にあっては大切なものであった。ただ，これは，言うまでもなく，編著14の中で扱った「明治以降における城下町プランの変容」という視点同様，考え方・テーマとしては

旧来のものである。

これに対して，著書13の直後に出た論文68（上掲）では，第1の視点や「心象風景[37]のなかでの城」といった論点と共に，町割の基本，より正確に言えば都市核である城（城郭），特に大手口と繁栄中心をなす町通りとの位置関係に着目して城下町プランをタテマチ型とヨコマチ型に類別する論点を提示し，これを中心に論じた。そしてその後，上記論文78においてこの論点が「近世城下町プランの基本」を捉える際の1つになることを再説し，更に編著17中の論文や論文91・109，特に前者において，大手前への街道の繰込み方に留意してタテマチ・ヨコマチ論の理論的展開を図った。

すなわち，このような論点が旧著［著書8］において既に取り上げた町割と屋敷割に関する研究［論文15］の延長線上にあることを示唆し，かつ，研究の出発点や発想の原点は異なるものの町割の基軸のありようを城下町プランとの関係において捉えしかもそこに歴史的な変化とその意味を論じる点では共通する足利健亮の研究[38]を批判するためもあって秀吉系城下とそれ以外の城下に分けたりしつつ，「街道の大手前への繰込み方式」5類型に基づく本格的な検討を行なった。更に，この論文を論文91と併せて著書21に再録するに当たっては，この論文に対する足利のその後の批判[39]を含む同氏との論争についての見解を述べている[40]。また，このタテマチ・ヨコマチ論と旧来の5類型論に基づく個別城下町の概観を関東の場合について行なった論文109での試みを，中部地方を除く[41]全国の多数の城下町に拡大している。

両氏の論争は歴史地理学の問題としては大切であり，「たかがタテ・ヨコのおはなし」ではなく[42]，足利にとってのみならず矢守にとっても決してないがしろにできない[43]問題であるが，両氏の主張についてここでこれ以上論じることは差し控え，次の2点を指摘しておきたい。それは，氏が亡くなる半年前に出，実質的には氏の最後の本格的論文になる札ノ辻を扱った論文133の狙いの1つも，以上述べた城下町プランをめぐる第3の論点に沿い，町割の基準線に関わるものであること，そしてその構想は，文部省科学研究費による重点領域研究「イスラムの都市性」の研究会で日本の城下町プラン理解の3つ目の視座として提示された［口頭発表26，論文131］こと，この2つである。

尤も，高札場―札ノ辻に関する本論文の後半では札ノ辻の賑わいやトポスといったことが取り上げられていて，これは氏の城下町研究の第4の論点，すなわち，論文68でも簡単に扱った人文主義地理学的な論点の1つをなす。建築史の分野で論じられているヴィスタや，城のまた城からの眺めについての小論［短報74・55］などもこれに類似のものと言えよう。

そして，城下町研究の第5の論点は，前の項目の最後に挙げた論文72や内外の旅行者の記述を綴り合せながら近世城下町の成立ちや景観をたどる論文90のそれであり，城下町に関する氏のいわゆる人文主義地理学的研究のもう1つの論点をなす。後者は雑誌の性格に合わせてやわらかな読み物風になっているのに対して，論文72は，『東遊雑記』・『西遊雑記』とい

う旅行記（紀行文）中の城郭や城下に関する「比較地誌学」的記述を，「主図合結記」に関する記述をも絡めて論じており注目される。

ところで，この場合は古川古松軒という人物に関する研究でもあるのだが，後期において目立つ，このような人物研究のうち都市関係のものとして，秀吉の京都改造事業を扱った論文87や，京都にとどまらない秀吉の一連の土木・建設事業を城下町研究として行なった論文100がある。また，論文121では，これを収載する書物の目的もあって江戸と城下町を例に，上記の論点がほぼ網羅されているが，このような城下町形成や城下町プラン，明治以降の変容などについて1都市を対象に総合的に検討した研究としては，姫路を扱った論文107が重要である。この論考は，このような，重要性が個々に認められている複数の分析視角に基づく城下町誌研究が，城下町の歴史地理学的研究の1つとして必要だと氏が考えていたであろうことを示している。また，編著28『城下町の地域構造』の序説では，1975年以降のものに限った収載論文の解題を行なっているが，その際，地域を国家・藩領・城下町という3つのオーダーで捉えつつ，また研究動向と今後の課題にも目配りし，編著20中の論考（上掲）同様，著書10の続編的なものに仕立てている。最後に，依頼原稿の論文83では旧城下町域の地名を扱っているが，その際，用途地域―城下町プランとの関連に留意した検討を行なっている点が矢守らしい。

なお，1988年に出た著書21については既にヨコマチ・タテマチ論に係わって紹介したが，実際矢守は，本項で紹介した後期第3期の論考［論文70・78・91・108・109，編著14・15・17所収論文］を中心に再構成し[44]，江戸の空間構造に関する一文を書き下して一書とするに当たり，この論点に最も力点を置いており，「城下町のかたちに，いわば『藩政の差』」を見ようとしている。

ところで，後期第2・第3期の研究の特色の1つとして城下絵図以外の古地図や名所図会・旅行記に関する研究があることについては既に編著に関わって述べたが，このような特色は，勿論，著書や論文などを振り返るとき一層はっきりする。また，こうすることによって，これらの資料に描かれている内容の歴史地理学的読取りではない多様な論点やテーマが取り上げられていることがわかる[45]。以下，地図史研究に関するものから順次跡づけてみよう。

＜地図史研究の多様な展開―その1＞

まず指摘したいのは，著書13と著書14を相次いで刊行し，内外の都市図の歴史に関する研究を集大成してからわずか2年後の1977年が，氏の地図史研究が都市プランとの関わりを越えて展開し出したことを明確に示す成果の出た年であり，それ故，この年を境に後期を第2期と第3期を分けることができるという点，そしてその展開はまず国絵図を対象とする形で始まったという点である。

すなわち，この年の末に「幕府撰国絵図と板行国絵図」に関する論考を共編著［編著12］

の中で発表した（既述）り，故郷近江の「板行国絵図と名所図会」に関する論文［論文73］を発表したのに加えて，その半年前には著書16を公表した。この作品は，いわゆる分国図帖[46]の系譜や刊行国絵図の流れの中で『大日本輿地便覧』を位置づけ，地名の精度などについて検討するという，書誌学的地図史研究として注目すべきものである。そして，城下絵図をはじめとする都市図研究の場合は矢守自身の意志で展開を図っていった面が明瞭だったのと対照的に，これら3つの仕事は，都市図研究者としての業績が評価されて執筆依頼されたのを機に，いわば外的要因によって行なわれた[47]。

ところが，のちに「石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究」に参画した際には，測量術に係る技術史的考察という，従来の地図史研究に欠けていた論点からの斬新な研究［論文105］を行なって独自の領域を開拓することに成功し，この研究が直接の契機になって，享保期を中心とする江戸時代前期における測量術諸門流の特色を用器や方術に即して追求するというパイオニア的な労作も著して，この種の研究を体系化した［論文102］。地図史研究全体を視野に入れて主体的に新境地を開拓しようとする意欲がはっきりと認められる。

しかも，この10年前に都市図の歴史研究に関わって論じることのあった［論文64（のち，著書13所収）］遠近道印（おちこちどういん）もここで俎上にのぼることになったのを受けて，この人物についての新解釈も別に発表［論文93・98，短報51］したり，論文102において特に取り上げた「町見便蒙鈔」の著者である金沢藩の兵学者・地図作成者（カルトグラファー）有沢武貞の父永貞の著「梧井庵年譜」を現代文で摘記してその生涯を辿るといった作品［論文96］も著した。

ところが，後期の第2期・第3期に発表された作品は多くが著書18・20・21・22に再録されていく中にあって，この項で紹介した論文93・102・105などは，おそらく，一般向けの啓蒙書には馴染まない専門性の強い内容であるために，再録されておらず，著書16も一部が著書22に収載されたにとどまる。だが，氏の後期第2・第3期の著作・研究活動という点ではこれらの作品は重要であり，氏の地図史研究の多様な展開を正確に理解するにはこのような，詳細で，ある意味では伝統的な書誌学的実証研究を推進していったことに注目せねばならない。氏の地図史研究の多様な展開を，次に述べる人文主義地理学的として括られる作品群のみに注目して理解するのでは不十分である。これらの作品には比較的気軽にエッセイ風に書かれたものが少なくないことも見逃してはならない。そして，矢守の古地図研究に関わって忘れてならない次の2つの業績もまた，今述べたことを裏づける。その1つは，ブリッカーの大著 *Landmarks of Mapmaking* の翻訳［訳書2］であり，今1つは，カリフォルニア大学バークレー校の依頼を受けて1985年から1986年にかけて3度同校に赴き，同校東アジア図書館に所蔵されている三井文庫旧蔵古地図2300点の目録づくりと文献情報システムの1つRLIN（アーリン）のデータベースへの入力を指導したことである[48]（「略年譜」）。共にわが国古地図研究の第一人者としての氏に求められた仕事であったが，この仕事は言うまでもなく人文主義地

理学の枠に収まるようなものではなかった。例えば，その中の１点「世界図幷日本図屏風」中の日本図に関する論文127なども氏自身それまでに蓄積してきた書誌的実証研究の１つをなすものであった。

以上，城下絵図研究から始まった地図史研究のその後の展開を振り返ったが，展開はこれにとどまるものではなかった。すなわち，風景画・名所図会・旅行記のような古地図関連資料やそれらに描かれた景観ないし風景，あるいはその作成者・作者に関する研究とも様々に結びつく形でも展開し，しかも，既に述べたテーマに関するものも含めて，全体として１つのまとまりをなした。このことは，次項で紹介する論考も合わせて再構成して成った２冊の書物『古地図と風景』［著書20］と『古地図への旅』［著書22］を繙けば明らかであるが，以下，項を改めて記しておこう。

＜古地図研究の多様な展開―その２と名所図会・旅行記・人物研究＞

古地図研究の展開はまず①上記した城下絵図や国絵図の他にも，様々なジャンルのものに研究対象を広げることによってなされた。すなわち，南蛮地図屏風や道中図・村絵図などについての論考［論文134・短報76，編著10・29・短報68，論文123］があるし，名所図会についての論考［著書17］もこれに含めることができる[49]上に，都市図に関して多数の論考を発表した。大坂の都市図を扱った著書19や論文80・104，南波松太郎氏所蔵の大津の町絵図16点を比較解説した論文94，京都を描く一覧図と称された俯瞰図に関する論文79・110，江戸・東京関係の古地図と新旧の３種の地図による景観変化を解説した論文119，あるいは，欧米の都市景観図に関する論文75・101・103・132，短報79などである。また俯瞰図・鳥瞰図を含む都市景観図について力点が置かれ，ヨーロッパのものと日本のものとの比較や画法の異同の的確な指摘もなされている［論文130・事典２］。だが，これらにもまして注目すべきは，ドイツの２つの都市図叢とそこでの都市景観図に関する研究であり，数こそ日本関係のものに比べて少ないものの，これらによって，矢守の都市図研究が日本とヨーロッパとの比較の視点を持続しつつ展開していったことがわかる。

その１つである論文101は，都市景観図の地誌への使用を確立すると共に，先に著書14で注目した『世界都市図帳』その他ヨーロッパにおける都市図叢の刊行と一枚刷り都市景観図流行の契機となったシエーデルの『ニュルンベルク年代記』についての社会史的考察をふまえた都市景観図研究であり，もう１つの論文103は，都市図の歴史に屹立する金字塔である，上記『世界都市図帳』の画法とその多様性，平面図に近い鳥瞰図が最も好まれたことの意味などをめぐって論じている。

次に，多様な展開は，①のような描写対象ではなく，②描法の面から見たときの重要なジャンルをなす鳥瞰図や俯瞰図について，風景画・風景描写との関連にも留意しつつ論文92その他幾つもの論考を発表し，進化論的パラダイムとは異なる視座を提示するという面でも見

られた。このうち城下町の城下絵図と鳥瞰図を扱った論文88やヨーロッパの都市景観図に関する作品［論文101・103］については既に述べたが，論文92では風景画の多くが俯瞰的構図をとるということを指摘し，美術史研究者が中心になっての著書17では名所図会を扱って鳥瞰図を論じ，論文95では都市図屏風や名所絵など様々なジャンルの鳥瞰図の歴史を明らかにし，論文97では絵画と地図の狭間を論じた。また，論文106では景観を俯瞰的にヴィヴィッドに描きだす参詣曼陀羅・荘園絵図・名所図会・道中図などを広く例示しながら説明し，論文122では「地図と絵画のあいだ」を著名な鳥瞰図の作成者である鍬形蕙斎と橋本貞秀を通して述べた。更に，短報58は透視画法と名所図会について，短報68は俯瞰図について述べた。

氏は更に，③古地図の方位［短報63・77］や都市図の方位・縮尺・記号・彩色［論文87］などを論じたり地図の社会史といった新しい論点［短報49］を地図史の中で扱ったり，④地図作成者（カルトグラフアー）について論じたり，あるいは⑤古地図に描かれた景観や風景を問題にしたりしつつ，多面的なアプローチを展開していった。

このうち，④に関するものとしてはまず，論文80が，大坂の最も詳しい板行図の描写内容の分析に先立って作成スタッフについて検討し，論文115では，著名な地図作成者である長久保赤水と地図好きのすぐれた地理学者であり旅行記作家ともいえる古川古松軒，交流のあったこの2人について地図に係わって述べる。また，論文129では地図を政治に役立てんとした将軍吉宗にまつわる地図の話を記す。更に，上記の論文122では，②の問題に関わって蕙斎と貞秀の方法を解説し，貞秀が「絵画の域」と「地図の領分」の狭間に立って，全一的な景観の絵画的表出を行なうこと，いわば光学と地誌学の結合をめざしたことを明らかにする。また，⑤に関するものとしては，まず，上記論文80において大坂の最も詳しい板行図である図の描写内容も検討した他，描写内容の説明は著書18のポイントの1つにもなっている。また，論文89では大津の景観を国絵図などからたどり，論文117では大坂の市街地形成を古地図から見る。更に論文126では「浪花繁栄見物独案内」や論文104で取り上げた「浪華名所独案内」，そして古板地誌類によって幕末期の大坂の都市的成熟，地域的専門分化や賑わいの実態を生き生きと復原した。短報65では屏風絵に名護屋城下の景観を読んでいる。

次に，編著7中の序説に始まる旅行記に関するものとしては，旅を軸として道中記や旅に関わる名所図会や日本図その他ヴィジュアルな資料を紹介して，旅をキーワードとしての1つの総合が図られている編著29の他，道中記から関ヶ原の地域史を綴る論文84や，近江を描く旅行記の記述をたどる論文128がある。また上掲の論文115と関係の深い論文116では赤水と古松軒の旅行記録のあり方を論じ人文主義地理学に対する評価と懐疑を提起している。なお，論文118は，大阪大学における日本研究の先達に関する研究の中で，風景論への関心もあって，異色の地理学者志賀重昂を取り上げたものであり，近世の地図作成者や地理学者についての一連の人物研究の流れの延長線上に位置づけられる。

＜大阪研究―１つの総合の試み＞

ところで，既に本節3)の最初に述べたように，氏には，大阪大学に永く勤務したこともあって大阪に関する研究が多く，特に学位論文刊行後―後期において目立ち，後期の著作活動の１つの柱になっていた。従って，その幾つかについては既に紹介したが，今一度これらを含めて整理してみると，①著書19や論文80・104のような近世大坂関係の古地図そのものを主として扱った地図史的研究，②古地図を基に近世大坂の市街地形成や地域的特質を描き出すことに力点を置いた著書18，論文69[50]・117・126，短報55などや，地誌類も素材に加えかつ①的検討も併せ行なった論文120のような歴史地理学的研究，③論文112・113や短報66などの近世大坂に関する地誌情報についての紹介，④編著31のような歴史地図の作成，⑤短報50や同72のような地理学者や地図作成者の関係をみたものなどに分けることができる。が，総じて言えば，近世大坂の生き生きとした姿を興味深い同時代資料そのものの検討を伴いながら描き出すところに１つの大きな目標を置いていたとみることができよう。人文主義地理学的な論点も組み込みながら，１つの総合を近世大坂について試みようとしていたことが窺われる。学位論文の刊行後，いわゆる地方史誌の執筆に携わることをしなかった矢守がこと大阪についてだけは，いわば地域研究の場のような形で関わったのはこのためもあってのことであろう。その意味で，新修大阪市史にまつわる２つの仕事，すなわち，論文120[51]と編著31は氏の大阪研究において重要な位置を占めるものであったと考えられる。

6）前掲2)。しかも，地理学の正井泰夫（地理学評論，地理）や地図学の清水靖夫（地図）の他，地図史の木村東一郎（歴史地理学会会報），歴史学の西山松之助（東京新聞），都市・建築史の西川幸治（月刊エコノミスト），グラフィック・デザイナーの杉浦康平（月刊現代），物理学者・地図研究家・エッセイストの堀淳一（サンケイ新聞），詩人の田村隆一（週刊サンケイ）ら多彩な顔触れによって紹介され，高く評価されている点が注目される。

7）発売（1974年５月５日）から約１カ月後の圖書新聞（６月15日）―「今週のベストセラーズ」によると，東京日本橋の丸善では，江藤淳『海舟余波』，司馬遼太郎『歴史の中の日本』，辻邦生『モンマルトル日記』に次いで第４位の売れ行きを誇った。因みに５位は小松左京『異状気象』であり，学術書のベストセラーは他の９店についてみても，上記丸善での『都市図の歴史―日本編』のみであった。地理学者の作品としてはきわめて異例なことであった。

8）このことを正面から論じたものはないように思うが，このことは地理学の１つの検討課題になるであろう。

9）大邱府の最高地価点であったという（[文芸１]）。本パラグラフの引用はすべてこれによる。

10）著作目録の文芸１にはこの間の事情が記されている。なお，たとえば矢守自身である「私」の出生をめぐっての印象的な記述は，ここに記された12月19日という出生日が実は事実とは異なるということを知ることによって一層印象深いものになり，この作品が創作であることが改めて実感されるが，この作品は，基本的には，「事実に基づいた自叙伝的作品」（多紀子夫人）であり，それ故，地理学者としての氏を知る者には，場所・風景の美しい記述に続く氏の「方向感覚」に

ついてのくだりなども興味深い。氏の最初の作品である上に目に触れることの少ないものでもあるので，少し長くなるが出生のくだりから続けて引用しておきたい。

一九二七年十二月十九日，私は朝鮮慶尙北道大邱府元町一丁目十番地に於て出生した。母が出生届を來春に延期しようとしたが，父は反対したそうである。人生の出発を虚偽で穢させ度くないという主張である。

わが生れ故郷は京城へ百九十六・七哩，釜山へ七十七・六哩。この起・終点の二都市を除けば京釜本線に沿う最大の都邑で，終戦当時は人口二十数万であつた。太陽は鳥足・童鶴嶺に昇り臥龍山に沒した。北空を限る八公山連嶺の雪溪は，大邱盆地に春が訪れても長く輝いているのを常とした。これは太白山脈の支脈に該当する。我々は南方の眺望を最も愛した。八助嶺を背景にした琵瑟山の優美な山容。「あのお山の方が南やさかいこつちが北，そして東に西や」母にそういう教え方をされた私は，後年不案内の土地に趨いた際にも，先ず先（南の誤植）方を尋ねて其の方角の中空に琵瑟山を想定する事に依つて，俄に「方向感覚」が安堵するという性癖をもつようになつた。

11）「朝鮮に於ける，少年少女の生活を通じて，彼地の歴史と地理を描いて，今日の激しい現実を示している」「アンビシャスな作品」との選評（峰専治［文芸１，29～30頁］）は将に正鵠を得ている。

12）氏の研究が偏狭な郷土研究などとは全く相容れないものとして展開していったことは言うまでもない。それは，「ふるさとへの挽歌」［文芸６］に感慨を込めて記されている，故郷＝国ではない，氏の故郷感からも理解できる。なお，「上でも」と記したのは，研究を離れたところでの晩年の矢守には，故郷への思いが意外にも強かったことを一再ならず承ったからであるが，それはこのような故郷感であった。一節を引用しておこう。「それに何よりも，自分で本当に懐しいと感得できるのは，湖北地方の一隅，亡父の墓のある本籍地や，その近くの母の里のあたりだけなのだ。しかも＜私の郷国＞は，このように空間的に狭く限定されるだけでなく，時間的にも，母の実家である寺の庫裏に世話になっていた引き揚げ後の一時期となってしまう。……あれから後はどこの土地に何年住んでも，＜仮寓＞のように思われ，恐らくはこのままの気持で一生がすぎるだろうと感じている。」

13）これは『日本歴史地理総説　近世編』の刊行が遅れた（1977年）ために順序が逆になったが，その「総論」として執筆された論文70を補充・改変したものである。

14）この問題については拙稿「日本の近代地理学における『地域』」，人文地理46-2，1994で述べた。

15）「著作目録」著書８の「はしがき」ii頁。なお，本書については，1971年２月27日に人文地理学会第35回歴史地理部会において合評会が行なわれている。武藤直「矢守一彦『幕藩社会の地域構造』合評会――山澄元氏（奈良女子大学）の書評を中心として――，人文地理23-3，1971.

16）水津一朗『社会集団の生活空間』大明堂，1969

17）たとえば，藤岡謙二郎・南出真助・出田和久・野間晴雄『新訂　歴史地理』大明堂，1990。浮田典良『地理学入門――マルティ・スケール・ジオグラフィー』大明堂，1995。

18）小和田哲男『城と城下町』教育社，1979。なお，この一部は編著28に所収。

19）主図合結記との出会いが大学院時代に遇ることについては著書11・13に記されており，13ではさらに率直に「『近世城下町プランの諸類型と変容系列という』考え方についてのヒントを」主図合結記から得たこと，そしてその後これに多数の異本・類本があることを知りしかもこの本に

ついての研究がほとんど皆無であったので書誌的・地図史的な検討を思い立ったことを述べている（111～112頁）。

20）生前，氏より承った。また船越昭生もこのことを指摘している（前掲1)），1993)。

21）著書８の第１編第４章１は後に論文49として発表されるものである。論文の方が７カ月遅いが，これは，恩師織田の退官記念論文集にふさわしいこの論文を京都大学に提出した学位論文（主査・織田武雄）の一部に組み込んだことによって生じたと判断される。

22）原図。製図はすべて森図房。

23）昭和57年１月から逝去するまで。後掲「略年譜」参照。

24）南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』創元社，1969

25）原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図　西日本編』鹿島研究所出版会，1972。同『日本の市街古図　東日本編』鹿島研究所出版会，1973

26）中村拓監修，海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『日本古地図大成』講談社，1974。なお，著書14刊行の後間もなくしては，織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成――世界編』講談社，1975が刊行された。

27）前掲 6)。

28）書評16

29）織田武雄『地図の歴史』講談社，1973。本書は矢守の著書13にもましてよく売れ，このために後に世界篇と日本篇に分けて新書版として出版されたが，本書の成功も，著書13が多くの人々を引き付けた一因としてあった（講談社にあって三国隆次氏と共に古地図シリーズを企画担当した宮地圭一氏による)。織田武雄『地図の歴史―世界篇』講談社，1974。同『地図の歴史―日本篇』講談社，1974。

30）訳書１はこの室賀との共編訳である他，室賀の遺稿集である室賀信夫『古地図抄―日本の地図の歩み―』東海大学出版会，1983の編纂の労を船越と２人でとっている。

31）歴史学に対する歴史地理学の独自性をめぐって考え続け，地理学における最新の理論（地域論）に依拠することによってこれを主張したものの，自らは納得するに至らず，このような方向で独自性を発揮することから退き，歴史地理学の独自性をより発揮できる途として町絵図の歴史地理・地図史というようなテーマに転じたことについては既に指摘したところであるが，学位論文を提出して研究者としての責任を果たした当時の矢守には，歴史地理学の独自性といったことよりは自らの研究の独自性といったことの方が大きかったと推察される。

32）1981年３月には第３刷まで出た。なお，著作目録ではこの10巻を一括表示すると共に矢守が直接タッチした２つの巻のみを再掲したので，本文に記した編著数(40)と目録中の編著数(33)が食い違っている。

33）大判（Ａ３判）36頁だてという体裁は，著書13では叶わなかった，古地図の魅力を美しいカラー図版で読者に手軽に（安価な書物として）伝えるという狙いから生まれたと考えられる。また，上記宮地氏によると，著書13の場合同様，美術書ブームや旅行ブームにも着目した企画であった。

34）著書13，82～83頁

35）短報82はこのヨコの比較のための２・３の分類に基づいて城下絵図を概観したものである。

36）著書13，83頁

37）心象風景というものに対する矢守の関心は早くからあり，1954年の短報［短報３］において領民の心象風景に対する領主の対応を史料に見ている他，この２年前の処女作［文芸１］において

既に心象の語を用いているし，1975年のエッセイ［文芸6］も「私の心象風景」で結んでいる。

38） 足利健亮「宇治川の治水」，林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史　第2巻』，宇治市役所，1974。同「秀吉はなぜ伏見城を築いたか」，『別冊歴史読本　伝記シリーズ8，豊臣秀吉』1978。

39） 足利健亮「町と筋をめぐって（中）」地域，第8号，1981。同「町と筋をめぐって（下）」地域，第10号，1982。同「中世城下町から近世城下町への変容」，藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店，1983。同『中近世都市の歴史地理』地人書房，1984，222～230頁。

40） 著書21，78～81頁

41） 中部地方の城下町については次章で異なった観点からであれ論じているので省いたものと思われる。

42） 著書21，81頁

43） 足利健亮　前掲39）1984，iii頁，220～230頁

44） これ以前のものは論文68だけであり，これとて1975年，つまり後期第2期のものである。

45） 矢守は1963年という前期のごく早い時点で既にこのようなことを認識していたことに注目したい。すなわち，雑誌『地理』に5回にわたって連載されたエッセイは，地理学にまつわる思いなどを記して興味深いが，その中に次のような記述が見える――「……頭の中では城下絵図も，これを歴史地理の材料として用いる以前に，地図学史や測量術史の面から勉強してみる必要があると考えていた……」。

46） 「国単位の地図を輯めたアトラス」に対して氏が名づけた仮称。著書16「はしがき」。

47） このうち，著書16はその表題からもわかるように，太田亮の『日本国誌資料叢書』の復刻に当たり，参考用の古地図として国絵図を付すという方針の中で，最適のものとして選ばれた『大日本輿地便覧』の解説書であり，出版社の求めに応じて執筆した。尤もこの解説を次のような言葉で結んでいるように，都市図研究の次の研究対象として国絵図研究に進もうとの考えが氏自身の側にもあった。そして，この仕事が国絵図研究の重要な機縁になった。――「私はこのところしばらく，ひそかに国絵図研究を自らに課してきたのであるが，……（これまでの）調査結果を，どのように整理すべきか，実は考えあぐねていた。このたび，たまたま『大日本輿地便覧』とのおつき合いを余儀なくされるにおよび，それが他の幾つかの分国図帖を繰る機縁ともなった。そしていま，各期の分国図帖を，国絵図研究における分析視座の中心にすえることによって，各地方における地図作成の進展度が，ある程度，統一的に捉えられそうだということに気づいた。……この視座をスタートラインにして，……歩を進めてみようと思っている。」（52頁）。

48） 朝日新聞　1985年6月27日によると，この作業はアメリカ政府により予算化されたのに伴って実施された。短報63参照。

49） ただ，編著10の場合は旅という大きなテーマの下での扱いであるし，論文123では都市景観図と対をなす形で，またむしろ⑤に係わって取り上げられている。

50） この論文では，大坂の絵図の他，堺・平野郷や，貝塚・八尾などの寺内町，城下町岸和田や高槻などの都市図，更に，国絵図・河川図・寺社・観光図が取り上げられている。

51） 魅惑的な表題の論文126の内容はこの論文120のものにほぼ重なる。

4　おわりに

以上によって，学位論文刊行後の矢守が，新しい論点を加えつつ都市プランに関する研究

を継続・展開しながらも，それ以上に地図史研究にエネルギーを注ぎ，この分野の研究の進展と啓蒙に貢献したことや，古地図から名所図会，旅行記に対象を拡大したり，鳥瞰図や都市景観図によって「絵と地図の狭間」を論じる過程で，景観や風景を問題として人文主義地理学という地理学の１つの新しい流れにも，一定の距離を置きながら[52]乗っていったことが明らかになったが，この時期の矢守の著作活動の全体をみるとき，極力このようなテーマにエネルギーを集中しようとしていたことが明らかにみてとれる。このことは，学位論文刊行前とは対照的であった。と同時に，短報や書評・文献解題の類いについても当てはまり，一層際立つ結果になる。

すなわち，これ以外には，1976年に歴史地理学の教本２つを藤岡・足利との共著[著書15]と矢守の編著［編著４］として出し，その４年後に，名古屋大学時代の上司松井武敏との繋がりから『愛知県開拓史』に新田開発について執筆し［論文86］，そして，やはり人的繋がりから，交通心理学の長山泰久と『空間移動の心理学』を共編し自らは交通の発達史を概観した［編著30］程度である。

つまり，学位論文刊行前には，近世日本を対象とした地域論を研究の一方の柱に据えることによって，「地域」が最も重要な概念としてあった当時の人文地理学の全般にも係わっていたのが，学位論文の刊行後はこのような地域論から遠ざかっていく[53]中で，著作という点では人文地理学全般への関わりを弱めていき，独自の研究領域の拡大・深化に勤しんだ。これには，1962年に人文地理学担当の講師として大阪大学に赴任したものの，その講座化が実現せぬまま永く推移し，1975年になって漸く文学研究科に日本学専攻が設置された際に比較文化学講座という名称の下に講座化が実現して大学院生をとれるようになったという事情，また日本学科の創設によって学部学生をとれるようになったのはその更に11年後の1986年であったという事情，しかも人文地理学の研究・教育を比較文化学という名称の下でなさねばならなかったという事情［短報37参照］，これらの影響もあった[54]。

だが，その矢守の研究活動の場は，勿論のこと，終始地理学の世界にあったのであり，そこにおいて氏は独自の新しい研究領域を開拓する中で，隣接分野にも影響を及ぼしつつ常に学界をリードしたのである。このことは，これまで述べてきたことのみならず，後掲の略年譜からもはっきりと認められるであろう。いな，氏が人文地理学会会長として執筆した同学会の40周年を記念しての文章［論文124］には，学会の動向のみならず，わが国の第二次世界大戦後の人文地理学の動向や今日の課題が見事にまとめられ，終始人文地理学の全体を見据え続ける中で，新しい地平を切り開く仕事に立ち向かわんとした氏の姿勢が，ここに何よりもよく示されている。

突っ込んだ検討ができぬままながら，著書・編著・訳書・論文に関しては，論文59・135を除いてすべて触れたし，既に予定枚数に達してもいるので，これをもってひとまず本稿を

閉じるが，その前に2つのことを是非指摘しておきたい。

その1つは，氏が城下町などの歴史的都市を地理学の立場から解明していこうとした際に，特に最初は用途地域制のありようや城下域と外郭との空間的関係といったいわば平面図的な見方に立つものであったにもかかわらず，城下町（都市）の地域構造とか内部構造といった用語ではなく，城下町（都市）プランという用語を採用し，「都市のヴィジュアルな空間構成」という，脹らみがあると同時に，地表に実際に刻印された事象に，つまりプランという言葉に含まれる計画という意味を基本的には含まない，その意味では限定の明確な定義[55]を与えたことである。もし，地理学，特に都市地理学の通常の用語法や概念に従って地域構造ないし内部構造といった用語を用いていたならば，都市地理学の研究がそうであるように，機能的地域区分の域を超えるものにはなりにくく，従って，景観を地理学のように平面図的には理解しない隣接分野に，矢守の考え方がこれほど受け入れられることにはならなかった可能性がある。いな，それ以前に，矢守自身，鳥瞰図や風景画・都市図を都市プランや都市景観，都市の風景と関わらせて問題にするということができにくくなったであろう。その意味で，都市プランという用語ないし概念を研究の最初の段階から編み出したことの意味は，矢守にとってもまた大変大きい。なお，この点に関して言えば，1970年に書いた城下町プランに関する英語論文では regional structure すなわち地域構造の語を用いている［論文42］。また，当時の地理学にあっては地域構造という概念ないし用語は地理学における最も重要なものとしてあった[56]。

次に今1つは，人文主義地理学の一定の評価ないし，人文主義地理学的な研究は，20世紀後半における欧米の人文地理学の潮流に呼応してのものであるし，絵図や旅行記・風景などを対象とするところからも生まれたものであるが，それ以前に，氏自身の価値観や関心のありよう・思索に由来する一面があることにも注目すべきであるということである。

矢守の最初の作品である「朝鮮海峡」にその片鱗を認められるという私の理解はともかくとしても，人文主義地理学といった言葉をおよそ見出せなかった1960年代の前半に『地理』に連載された地理学や現実をめぐるエッセイ［短報10～15］を書いた頃の矢守は既にこの人文主義地理学の主張の一面に通じることをさらりとではあるが記している点に注目したい——いわく，「結論的に言えば＜人間不在の地理学＞だからおもしろくない[57]」，また，いわく「たとえば賢治の『イーハトーヴォ』の人文地理，長塚節の『土』の村落構造，水上瀧太郎の『大阪』当時の社会経済史の究明に進めば，作品観賞や批評にある新しい視角がひらかれそうに思います[58]」と。文学者のいわゆる≪文学散歩もの≫に対するこの批判などは，その後の文学におけるこの方面での研究の進展と，その影響を受けての地理学における文学作品への関心のことを思うとき，注目に値しよう。

そこで，人文主義地理学に対する氏の評価と理解を最もまとまった形で表した作品と位置

づけられる『古地図と風景』［著書20］[59]の「あとがき」の一節を引用し，本稿のおわりとしよう。

「私自身は，……M. J. ブレイクモアなどが，＜オールド・イズ・ビューティフル・パラダイム＞として貶(しりぞ)ける昔ながらの視座にとどまっていることをよく承知している。もっとも私は，現象学的地理学などという新思潮の舶載される以前から，計量的に処理される『空間』よりは，花も実もある『場所』の方に，ことにその風景を叙する記録や絵図に心をひかれてきたのであった。」

ここには，氏がそのような研究を行なわなかったために触れなかったが，地理学の潮流を念頭において氏の著作活動を振り返る際には必ずや言及せねばならない計量地理学に対する氏の姿勢が端的に示されている。また，それまでの地理学に対する根本的批判に基づく New Geography として登場し理論地理学とさえ称されもしたこの計量地理学への反批判として登場した人文主義地理学ないし現象学的地理学に言及されているのみならず，これと矢守の研究史・関心のありかたとの関係や，「地理学の革命」の担い手によって伝統的地理学として総括された地理学と一賢明にも一決別しはしない矢守の立場も端的に示されている。しかも，地域論が「革命」前の地理学において理論上の問題として大きな関心を集め進展していったという周知の事実と，氏がこのような地域論，特に機能主義的地域論に立脚する形で進めていった近世日本の歴史地理学的研究から学位論文刊行後離れていったという事実を勘案するならば，伝統的地理学と氏の研究との関連さえもがこの一節の背後に垣間見られることになるのである。

52）この点については，上記したことからも窺えるであろうし，私自身折りに触れて承ったことでもある。地理学のテーマや方法に流行がありすぎることに対する疑問を矢守も古くから抱いていた［短報11・13］。著書21の272頁参照。

53）1963年に書かれた短報13には，既に間接的な表現ながら，地理学が「地域」という語に期待をかけすぎることへの懐疑がさらりと述べられていることを重視したい。なお，地域論については，この推進者であった水津一朗「戦後40年を顧みて」人文地理38-6，1986および注14)参照。

54）このことについては氏から折りに触れてお聞きした。なお，1994年4月の教養部の全学分属という大阪大学の組織改革を踏まえて翌年4月に文学部の大講座化が図られた際，人文地理学講座が11講座の1つとして設置された。

55）この点で，計画的意味合いをもプランという言葉に含めて条里プランという概念を提示し，そのことによって条里をめぐる歴史地理学的研究を大きく進展させた金田章裕の場合（『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂，1985。『古代日本の景観――方格プランの生態と認識――』吉川弘文館，1993）とは，既に指摘した（金坂清則　金田章裕：『古代日本の景観――方格プランの生態と認識――』，地理学評論67―2，1994）ように，異なる。ただ，金田の場合も条坊プランについては矢守と同様の用い方をしている。この点については，両者を方格プランとして包括する時には若干問題が生じるであろうが，それはともかくとして，隣接分野へのインパクトという

点では，戦後日本の歴史地理学作品の中では最も大きかったといってよいこの２人の研究が共にプランという言葉を組み込んだ用語ないし概念を用いていることには注目しておいてよいだろう。地理学，少なくとも歴史地理学からの研究には有効で便利な言葉であると思われる。

56） 拙稿　前掲14）

57） 短報12

58） 短報14

59） このことは著者自身が意識していることであった（短報57参照）のみならず，本書に対する評価も，地理学者の場合はこのような点からなされた（歴史地理学129，1985の青山宏夫の書評や地理30-4，1985の山野正彦の新刊紹介。また，人文地理学会の第12回歴史地理研究部会＜第９回地理思想研究部会と共催＞での，久武哲也をコメンテーターとして行なわれた本書を素材とした議論―人文地理39-1，1987，94頁＜文責：小林健太郎＞）。同じ学問を専攻する私には，当然ながらよく理解できる評価ないし整理のしかたである。だが，ある意味ではそれ以上に興味深いのが，山崎正和・丸谷才一・木村尚三郎による鼎談書評（文藝春秋 '85-2，1985）での評価とコメントである。矢守の同僚でもあった山崎による紹介で始まるこの書評で，山崎は，本書が『都市図の歴史』というまとまった書物の落ち穂拾いという感じであり，体系的な本ではないが「地理に対する我々の愛情と知識を共に刺激してくれる有益な本である」とし，それを受けて木村も，いい本であり，特に江戸時代の古地図に俯瞰図が多いという指摘が関心をひくとして，ヨーロッパ史学者らしい比較の視点に立ったコメントを行なう。これに対して，丸谷は色々なことを考えさせてくれる本だという木村の結論に同意する一方で，博識であり面白い事実の指摘はあるもののそこから先に話が進まず，古地図の魅力が色々書いてあるのに地霊という概念が一度も出てこないことを批判する。地霊と金雲の描写を結びつける解釈自体は山崎が的確にフォローしているように直ちに受け入れることはできないし，丸谷が「呪術的世界像を全く抜きにして，近代人の感覚で古地図を考えている。そこで出てくるのは古地図の様式美だけということになる。」という理解も極端にすぎるが，丸谷が貝原益軒の作品についての矢守の理解と評価に関わっても，名所図会中の名所歌における呪術的世界像の反映という視点のなさを悔やみ，これと自然科学的な世界像との絡みあい，覗ぎ合いを論じてほしかったとする点は重要である。つまり，丸谷は，人文主義地理学が問題にしようとし，矢守自身もその立場を意識して取り組んだポイントそのものが実は不十分であることを指摘しているのであり，しかも，本書のキーワードになっている人文主義地理学というものをことさら持ち出すこともなくこれを主張しているのである。この最後の点は，山崎と木村のみならず，雑誌『日本歴史』444での紹介者にも通じる点である。私には，このような点が，地理学以外の人々であるためこうなるのだと言ってしまえばすむようなことでは必ずしもないように思われる。

キーワード：矢守一彦，著作目録，地理学史，都市プラン，城下町研究，近世歴史地理学，地域論，地図史，人文主義地理学（ヒューマニステイックジオグラフイー）

矢守一彦博士著作目録

I　著書（共著を含む）

1　『人文地理學學習指導書(Ⅰ)』（文部省通信教育認可），佛教大学，14頁，1957年３月

2　『人文地理學(Ⅰ)』（文部省通信教育認可），佛教大学，86頁，1957年３月

3　『人文地理ゼミナール　歴史地理・郷土地理』大明堂，２+２+２+321+10頁，1958年２月（藤岡謙二郎・水野時二・小池洋一・山崎謹哉と共著）

※「人口の変遷と人口の歴史地理」（95～110頁），「封建都市に関する若干の問題点」（120～133頁），「政治的境域の歴史地理」（176～185頁），「宮座を通してみた地域社会の結びつき」（221～226頁），「民俗の地域性」（234～240頁）

4　『京都・奈良・南紀―中公ガイドブックス　日本の旅６』中央公論社，247頁，1963年11月（吉田光邦・日比野丈夫・船越昭生・松尾尊兊・末尾至行・成田孝三・小池洋一と共著）

※「吉野・大台ガ原・高野山」（164～175頁）

5　『春日井市近世村絵図集』（春日井市史　資料編別冊），春日井市，28+３頁+トレース図25点，1964年３月（安藤慶一郎と共著）

6　『人文地理ゼミナール　歴史地理』大明堂，211頁，1967年３月（藤岡謙二郎と共著）

※「人口の歴史地理」（56～72頁），「村落の歴史地理」（73～82頁），「民俗の歴史地理」（83～94頁），「（都市の歴史地理のうち）封建都市」（111～124頁），「生産の歴史地理」（125～143頁），「商品流通の歴史地理」（144～155頁），「政治的境域の歴史地理」（175～188頁），「戦後における歴史地理学の研究動向」（197～200頁）

7　『世界の発見――地図でみる探検ものがたり――（ワールドブック６）』大日本図書，178頁，1970年１月

8　『都市プランの研究――変容系列と空間構成――』大明堂，xi+438頁，1970年11月（歴史書懇話会25周年記念復刻51点中の１点として1993年10月に復刻）

9　『幕藩社会の地域構造』大明堂，xi+316頁，1970年12月

10　『城下町研究ノート』古今書院，179頁，1972年４月

11　『城下町』学生社，234頁，1972年６月

12　『国境いの村――天竜・奥三河の歴史的風土』学生社，213頁，1972年12月（安藤慶一郎

と共著）

※「国境いの村への道」（7～22頁），「落武者の開いた村々」（23～37頁），「近世村落の成り立ち」（39～54頁），「入混り村」（55～69頁），「信州中馬と三州馬稼ぎ」（71～88頁），あとがき（211～213頁，安藤と共同執筆）

13 『都市図の歴史―日本編』講談社，478頁，1974年5月

14 『都市図の歴史―世界編』講談社，468頁，1975年7月

15 『歴史の空間構造』大明堂，x＋234頁，1976年5月（藤岡謙二郎・足利健亮と共著）

※「村落構造の復原のうち(二)近世」（101～115頁），「都市の立地と形態」（116～144頁），「土地開発史と農業の発達のうち(二)近世」（160～171頁），「工業分布と流通形態の変遷のうち(二)中世・近世」（179～192頁）

16 『日本國誌資料叢書關係國繪圖「大日本輿地便覧」抄』講談社，52頁，1977年5月

［のち，一部が著書22，第Ⅲ部第三章］

17 『日本屏風絵集成　第十巻　景物画――名所景物』講談社，178頁，1980年3月（武田恒夫・千野香織・榊原吉郎・成瀬不二雄と共著）

※「名所図会をめぐって」（136～141頁）

［のち，著書20，第Ⅰ部第三章の一部］

18 『大阪古地図物語』毎日新聞社，262頁，1980年7月（原田伴彦・矢内昭と共著）

※「日本総図のなかの大阪」（11～27頁），「大阪史の自然地理」（28～38頁），「大阪古地図小史」（57～76頁），「古地図からみた市街の成り立ち」（77～85頁），「堂島・中之島」（183～190頁），「下船場と堀江」（191～198頁），「北郊から西郊へ」（199～209頁），「住吉と平野郷」（210～218頁），「明治以降の変容」（219～258頁）

19 『古地図をよむ』清文堂出版，7頁，1981年11月（「新板大坂之図」「新撰増補大坂大絵図」復刻・刊行＜それぞれ額装・屏風装＞に際しての別冊付録）

［のち，著書20，第Ⅳ部第一章の一部］

20 『古地図と風景』筑摩書房，3＋8＋343頁，1984年9月

21 『城下町のかたち』筑摩書房，277＋4頁，1988年3月

22 『古地図への旅』朝日新聞社，296＋Ⅻ頁，1992年7月

［このうち，第Ⅱ部第一章第1節「古地図への旅」は，のち，堀淳一編『日本の名随筆別巻46　地図』作品社，1994年12月，106～114頁に再録］

II　編著（共編著を含む）

1　『城郭図譜　主圖合結記』名著出版，463頁＋表９，1974年３月
※「城郭図譜　主圖合結記　解説編」（361～463頁＋表９）

2　『日本都市生活史料集成』全10巻，学習研究社，1975年７月～1977年10月（原田伴彦・西川幸治・森谷尅久と共編。うち矢守が直接編集した四と八のみ後掲し他の８巻は省略）

3　『日本都市生活史料集成四　城下町篇Ⅱ』学習研究社，661頁，1976年１月（原田伴彦・西川幸治・森谷尅久と共編）
※「序説」（１～４頁），「山城淀下津町記録　解題・校注」（371～416頁，今井修平と共同執筆）

4　『空からみた歴史景観』大明堂，107頁，1976年７月（藤岡謙二郎監修）
※「はじめに」（２頁），「城下町姫路」（74～75頁）

5　『日本の古地図④　京都』講談社，36頁，1976年11月（大塚隆と共編）
※「京図のあけぼの」・「京大絵図の成立」・「観光地図の花開く」・「御所の図」（以上カラー解説，１～20頁，大塚隆と共同執筆），「京都図の流れ」（22頁）
[「京都図の流れ」はのち，著書20，第Ⅲ部第一章の一部]

6　『日本の古地図⑤　城下町――萩・津和野・鳥取・備中松山・岩国――』講談社，36頁，1976年11月
※「城下絵図を片手に」（表紙Ⅱ），「城下町絵図（カラー解説）」（１～20頁，泉順逸・沖本常吉・桂芳樹・近藤隆彦・福井淳人と共同執筆），「城下町の絵図とプランの見方――中国地方の場合――」（22～24頁）

7　『日本都市生活史料集成八　宿場町篇』学習研究社，782頁，1977年１月（原田伴彦・西川幸治・森谷尅久と共編）
※「序説」（１～４頁）
[のち，著書20，第Ⅱ部第一章]

8　『日本の古地図⑩　京都幕末維新』講談社，36頁，1977年５月（大塚隆と共編）
※「幕末の京の鳥瞰（カラー解説）」・「慶応の大絵図（同）」・「鳥羽・伏見（同）」・「文明開化（同）」（以上１～～20頁，大塚隆・鎌田道隆と共同執筆），「幕末・明治前期の京都図」（21～23頁）
[「幕末・明治前期の京都図」は，のち，著書20，第Ⅲ部第一章の一部]

9　『日本の古地図⑫　金沢・名古屋』講談社，36頁，1977年６月

※「有沢武貞の<人と作品>」(22～23頁)

10 『山陰道（江戸時代図誌　第19巻)』筑摩書房，174＋7頁，1977年7月

※「古地図と山陰道と」(147～153頁)

[のち，著書20，第Ⅱ部第四章]

11 『日本の古地図⑪　浪華大坂』講談社，36頁，1977年8月（原田伴彦と共編著）

※「近世大坂のあけぼの（カラー解説)」・「大坂図のあゆみ（同)」・「港と川絵図（同)」・「名所案内図（同)」（以上，1～20頁，矢内昭と共同執筆)，「大阪町絵図研究書目」(35～36頁)

[「大阪町絵図研究書目」はのち，著書20，第Ⅲ部第三章の一部]

12 『日本国尽（江戸時代図誌　別巻1)』筑摩書房，175＋8頁，1977年12月（児玉幸多・原田伴彦・森谷尅久と共編）

※「幕府撰国絵図と板行諸国図」(166～175頁)

[のち，著書22，第Ⅲ部第一章]

13 『近畿の市街古図』鹿島出版会，xvi＋図版16点＋57頁，1978年9月，（原田伴彦・西川幸治と共編）

※「序文」（原田伴彦・西川幸治と共同執筆）

14 『城と城下町　生きている近世1』淡交社，201＋4頁，1978年10月（藤本利治と共編，藤岡謙二郎監修）

※「明治以降における城下町プランの変容」(194～201頁)

[のち，著書21，第Ⅰ部第四章]

15 『中部の市街古図』鹿島出版会，xix＋図版22点＋79頁，1979年5月（原田伴彦・西川幸治と共編）

※「序文」（原田伴彦・西川幸治と共同執筆)，「都市発達史・中部」(Ⅺ～ⅩⅩ頁)

[「都市発達史・中部」は，のち，著書21，第Ⅱ部第二章]

16 『中国・四国の市街古図』鹿島出版会，xvi＋図版15点＋53頁，1979年6月（原田伴彦・西川幸治と共編）

※「序文」（原田伴彦・西川幸治と共同執筆）

17 『講座・日本の封建都市　第3巻　地域的展開』文一総合出版，653頁，1981年11月（豊田武・原田伴彦と共編著）

※「城下町プランにおける『近世』――とくに町割りにおける『竪』と『横』について――」(144～169頁)

[のち，著書21，第Ⅰ部第三章の一部]

18 『浅野文庫蔵諸国古城之図』新人物往来社，262頁，1981年12月

※「序」（1～2頁），「浅野文庫蔵『諸国古城之図』について」（248～261頁）

19 『日本城下町絵圖集――近畿編』昭和礼文社，46頁＋複製図19点，1982年4月（原田伴彦と共編，児玉幸多監修）

※「編集のことば」

20 『講座・日本の封建都市　第1巻　総説篇』文一総合出版，439頁，1982年5月（豊田武・原田伴彦と共編）

※「都市史研究と古地図」（379～396頁）

21 『浅野文庫蔵諸国当城之図』新人物往来社，237頁，1982年12月（原田伴彦と共編）

※「序」（1頁，原田伴彦と共同執筆），「浅野文庫蔵『諸国当城之図』について」（224～228頁）

22 『日本城下町絵圖集――東海・北陸篇』昭和礼文社，36頁＋複製図18点，1983年4月（原田伴彦と共編，児玉幸多監修）

※「編集のことば」（原田伴彦と共同執筆）

23 『講座・日本の封建都市　第2巻　機能と構造』文一総合出版，555頁，1983年5月（豊田武・原田伴彦と共編）

24 『日本城下町絵圖集――中国・四国篇』昭和礼文社，38頁＋複製図15点，1984年4月（原田伴彦と共編，児玉幸多監修）

※「編集のことば」（原田伴彦と共同執筆）

25 『日本城下町絵圖集――九州篇』昭和礼文社，34頁＋複製図16点，1985年1月（原田伴彦と共編　児玉幸多監修）

※「編集のことば」（原田伴彦と共同執筆）

26 『名城絵図集成　東日本之巻』小学館，191頁，1986年12月（矢守一彦監修）

※「概説　正保城絵図について（上）」（4～7頁）

27 『名城絵図集成　西日本之巻』小学館，191頁，1986年12月（矢守一彦監修）

※「概説　正保城絵図について（下）」（4～7頁）

28 『城下町の地域構造（日本城郭史研究叢書　第12巻）』名著出版，492頁，1987年1月

※「序説」（1～13頁），「近世城下町の空間構造――とくに町割の基軸について――」（373～383頁。歴史公論8-6，46～53頁，1982年6月＜論文91＞からの再録）

29 『旅――信仰から物見遊山へ』，『週刊朝日百科　日本の歴史』75号（第7巻　近世Ⅰ），30頁，1987年9月（1989年4月合本刊行，第7巻　近世Ⅰ，257～288頁）

※「『異』文化の体験と情報の伝達」（258～259頁），「日常からの“脱走”――旅の大衆化」（266～270頁），「読む旅，視る旅――道中案内と地図」（281～286頁）

［のち，著書22，第Ⅰ部第一章第1節の一部］

30 『空間移動の心理学（応用心理学講座６）』福村出版，ix＋322頁，1992年11月（長山泰久と共編）
※「交通の発達史」（16～33頁）

31 『新修大阪市史　第10巻　歴史地図』大阪市，（1996年３月刊行予定）
※「図４　近世大坂の所領配置」，「図５　天保期の大坂三郷」

32 『金沢城下絵図集成』能登印刷，（1996年６月刊行予定）
※「金沢城下絵図史」，「城下町の空間構造とコスモロジー――『金沢古蹟史』を読む――」（頁は未定）

33 『古版欧州都市図集成』柏書房，（1997年刊行予定）

III 訳　書

1 『蕃談（漂流の記録１）』（東洋文庫39）平凡社，306頁，1965年３月（室賀信夫と共編訳）

2 『世界古地図』（チャールズ・ブリッカー著），日本ブリタニカ，275頁，1981年６月

IV 論　文

1 「城下町の人口構成――彦根藩の歴史地理的研究Ⅰ――」史林　第37巻第２号，64～78頁，1954年４月
［のち，著書９，各説第八の一部］

2 「浜縮緬の流通機構について――江戸時代における中央市場と地方商品産地の問題――」人文地理　第７巻第１号，15～30頁，1955年４月
［のち，著書９，各説第十一］

3 「内水面漁業（若狭漁業の地理学的研究のうち）」，人文地理学会編『地域調査（人文地理・別巻）』柳原書店，319～336頁，1955年11月

4 「政治」，織田武雄・藤岡謙二郎・西村睦男著『人文地理学概論』蘭書房，319～340頁，1956年６月（藤岡謙二郎と共同執筆）

5 「近つ淡海――その昨日・今日そして明日――」，和歌森太郎・吉田精一・小川徹編『日本文化風土記　第５巻　近畿篇』河出書房，202～212頁，1956年６月

6 「西アジアの都市」，原随園監修　羽田明・日比野丈夫・西村睦男編『新講座　地理と世

界の歴史　アジア篇下』雄渾社，131～140頁，1957年１月

7 「商品流通の歴史地理的研究法」，藤岡謙二郎編『人文地理学研究法』朝倉書店，272～282頁，1957年12月

8 「朝鮮」，森鹿三・織田武雄編『歴史地理講座２』朝倉書店，115～133頁，1958年２月

9 「彦根藩における地方知行について――≪大名領国の歴史地理研究≫目論見のうち――」人文地理　第９巻第６号，19～41頁，1958年２月

［のち，著書９，各説第五］

10 「近世城下町プランの発展類型――序説」史林　第41巻第６号（特集　都市研究），121～140頁，1958年２月

［のち，著書８，第２編第１章］

11 「『長ノ城』の実測調査」，藤岡謙二郎編『国府の歴史地理学的研究(抄報)』，27～34頁，1958年２月（田中欣治と共著）

12 「近世における櫛田川下流域の土地開発」，藤岡謙二郎編『河谷の歴史地理』蘭書房，66～74頁，1958年３月（山崎俊郎と共同執筆）

［のち，著書９，各説第二］

13 「江戸時代における村落規模」，藤岡謙二郎編『河谷の歴史地理』蘭書房，389～402頁，1958年３月

［のち，著書９，各説第三］

14 「畿内における城下町規模と提封≪大名領国の歴史地理的研究≫――一つの試み――』，藤岡謙二郎編『畿内歴史地理研究』日本科学社，254～268頁，1958年12月

［のち，著書９，各説第九］

15 「近世城下町の町割と屋敷割に関する若干の覚書」，名古屋大学文学部編『名古屋大学文学部十周年記念論集』，573～596頁，1959年３月

［のち，著書８，第２編第３章］

16 「近畿地方の総観」，日本地理風俗大系編集委員会編『日本地理風俗大系　第８巻　近畿地方(下)』誠文堂新光社，321～346頁，1959年９月（織田武雄・佐々木高明・押野昭生と共同執筆）

17 「京都府」，日本地理風俗大系編集委員会編『日本地理風俗大系　第７巻　近畿地方(上)』誠文堂新光社，236～346頁，1959年10月(織田武雄・佐々木高明・押野昭生と共同執筆)

18 「城下町研究ノオト――その成果と課題――」人文地理　第11巻第６号，79～93頁，1959年12月

［のち，著書10，第１編第１章］

19 「地形・地質」・「エクメネーの進展」・「気候」・「条里制」・「郡郷の境域」・「東山道」・

「佐和山城とその城下町」・「築城前の景観」・「藩士・町民の出身地」・「(政治のうち) 領地」・「(町政のうち) 城下の戸口」・「(町政のうち) 町政機構」, 中村直勝編『彦根市史 上冊』彦根市役所, 21～41頁, 42～47頁, 48～60頁, 144～149頁, 150～156頁, 156～161頁, 325～333頁, 356～365頁, 418～427頁, 482～507頁, 641～645頁, 645～646頁, 1960年3月

[「藩士・町民の出身地」・「城下の戸口」は, のち著書9, 各説第八の一部]

20 「中世」・「近世(Ⅰ)」, 本田喜代治・松井武敏監修『明智町誌』明智町役場, 63～87頁, 88～118頁, 1960年3月

[のち, 一部が著書9, 各説第七の一部]

21 「農業」・「水産業」・「自然環境」, 酒井正三郎監修『四日市市史』四日市市役所, 465～558頁, 559～626頁, 1633～1662頁, 1961年3月

22 「彦根城下における人口動態について」歴史地理学紀要Ⅲ, 129～143頁, 1961年5月

[のち, 著書9, 各説第八の一部]

23 「城下町プランにおける『地域制』の明治以降における変化と作用——東海地方を事例として——」名古屋大学文学部研究論集XXVI, 75～96頁, 1962年3月

[のち, 著書8, 第2編第4章]

24 「朝鮮における城郭の諸形式と都城プランの系列について」歴史地理学紀要4, 111～125頁, 1962年8月

[のち, 著書8, 第1編第6章の一部]

25 「李朝における城邑の分布と規模について」地理学評論 第35巻第8号, 1～12頁, 1962年8月

[のち, 著書8, 第1編第6章の一部]

26 「(近世の) 陸上交通」・「(近世の) 人口および人口問題」, 中村直勝編『彦根市史 中冊』彦根市役所, 287～324頁, 473～492頁, 1962年9月

[のち, 前者は著書9, 各説第十, 後者は著書9, 各説第八第三節]

27 「エチオピア・ソマリランド」, 織田武雄編『新世界地理 第9巻アフリカ』朝倉書店, 259～285頁, 1962年10月

28 「尾張藩領の地域構造」, 安藤万壽男・伊藤郷平・佐々木清治・山岡政喜共編『東海地方(日本地誌ゼミナールV)』大明堂, 49～58頁, 1963年5月

29 「城下町の地域制, その面積構成比と微地形利用について」歴史地理学紀要5, 185～214頁, 1963年9月

[のち, 著書8, 第2編第2章]

30 「尾張藩の給知制と農民」, 安藤直太朗編『春日井市史 本文編』春日井市, 181～194頁,

1963年11月

［のち，著書9，各説第六第二節］

31 「(近代の)農業および水産業」・「(近代の)交通・通信」・「(現代の) 農業および水産業」・「(現代の)交通・通信」，中村直勝編『彦根市史　下冊』彦根市役所，381～426頁，427～439頁，773～812頁，812～820頁，1964年3月

32 「商品流通と城下町」，辻田右左男編『産業地理の諸問題　下』柳原書店，145～155頁，1964年3月

33 「集落地理学・歴史地理学（最近20年間における人文地理学の研究動向のうち)」，文科系学会連合編『研究論文集』第16巻，139～143頁，1965年3月（「集落地理・歴史地理（戦後20年間における人文地理学の動向のうち)」人文地理　第18巻2号，53～58頁，1966年4月は，これを一部修正したもの）

34 「都市形態の歴史地理的研究序説――ヨーロッパ中世都市を中心に――」人文地理　第17巻第4号，60～78頁，1965年8月

［のち，著書8，第1編第1章Ⅰ～Ⅳ］

35 「近世」（Ⅴ日本のうち)，藤岡謙二郎編『朝倉地理学講座7　歴史地理学』朝倉書店，201～218頁，1967年3月

［のち，加筆・改題（幕藩社会の空間秩序について）のうえ，著書9　総説第一。更に，藤野保編『論集幕藩体制史　第一期　第二巻　幕藩体制論・国家論』雄山閣出版，317～354頁，1993年5月に再録］

36 「旧城下における伝統産業の立地移動」，宮本又次編『大阪の研究――機関研究「近代大阪の歴史的研究」報告――』清文堂出版，167～207頁，1967年6月

［のち，著書8，第2編第5章］

37 「萩藩における給領と在郷武士の分布」，西村睦男編『藩領の歴史地理』大明堂，1～23頁，1968年4月

［のち，著書9，各説第四］

38 「都市囲郭の変容系列に関する覚書」人文地理　第21巻第1号，63～87頁，1969年2月

［のち，著書8，第1編第5章の一部］

39 「都市囲郭の成立・変容・消滅について」人文地理　第21巻第3号，45～68頁，1969年6月

［のち，著書8，第1編第5章の一部］

40 「都市史における広場――とくにドイツについて――」歴史地理学紀要12，257～292頁，1970年4月

［のち，著書8，第1編第3章］

41 「近世村落と地方統治機構」，北設楽郡史編纂委員会編『北設楽郡史　歴史編―近世』北設楽郡史編纂委員会，1～48頁，1970年5月
［のち，著書9，各説第一］

42 On the Regional Structure of Japanese Castle Towns, Kiuti, Shinzo(ed.) "*Japanese Cities: A Geographical Approach* (*Special Publication No. 2*), The Association of Japanese Geographers, p. 17～21, 1970. [11]

43 「60年代の個別城下町研究総覧」人文地理　第22巻第5・6号，39～54頁，1970年12月
［のち，著書10，第1編第2章Ⅲ］

44 「六〇年代における城下町研究の展望――〔陣屋町〕の項・〔江戸〕の項――都市史研究ノート①」地理　第16巻第2号，56～60頁，1971年2月
［のち，著書10，第1編第2章Ⅳの一部］

45 「六〇年代における城下町研究の展望――〔中世城館集落・戦国期城下町〕の項，その一――都市史研究ノート②」地理　第16巻第3号，80～85頁，1971年3月
［のち，著書10，第1編第2章Ⅰの一部］

46 「近世の社会と経済」，木内信蔵編『日本の文化地理　第18巻　日本総論』講談社，114～124頁，1971年4月

47 「六〇年代における城下町研究の展望――〔中世城館集落・戦国期城下町〕の項，その二――都市史研究ノート③」地理　第16巻第4号，60～65頁，1971年4月
［のち，著書10，第1編第2章Ⅰの一部］

48 「六〇年代における城下町研究の展望――〔城下町一般論〕の項，その一――都市史研究ノート④」地理　第16巻第5号，55～59頁，1971年5月
［のち，著書10，第1編第2章Ⅱの一部］

49 「西方世界における方格状町割の伝流」，織田武雄先生退官記念事業会編『織田武雄先生退官記念　人文地理学論叢』柳原書店，715～725頁，1971年6月
［先に，著書8，第1編第4章Ⅰ］

50 「萩の城下町に関する若干の覚書――都市史研究ノート⑤」地理　第16巻第6号，49～58頁，1971年6月，（免田千穂と共著）
［のち，著書10，第2編第1章］

51 「六〇年代における城下町研究の展望――〔城下町一般論〕の項，その二――都市史研究ノート⑥」地理　第16巻第7号，92～97頁，1971年7月
［のち，著書10，第2編第2章Ⅱの一部］

52 「N．グチュコフ氏の城下町研究――特に丹波篠山について――都市史研究ノート⑦」地理　第16巻第8号，77～83頁，1971年8月

［のち，著書10，第１編第３章］

53 「六〇年代における城下町研究の展望――〔明治以降の変容〕の項，その一――都市史研究ノート⑧」地理　第16巻第９号，49～55頁，1971年９月

［のち，著書10，第１編第２章Ⅴの一部］

54 「六〇年代における城下町研究の展望――〔明治以降の変容〕の項，その二――都市史研究ノート⑨」地理　第16巻第10号，60～66頁，1971年10月

［のち，著書10，第１編第２章Ⅴの一部］

55 「城下町プランの諸類型――小浜・松江・松本――都市史研究ノート⑩」地理　第16巻第11号，62～68頁，1971年11月

56 「経世論の城下町プラン」歴史読本　第17巻第12号，66～75頁，1972年11月

［のち，著書13，第二部第二章(二)］

57 「鶴岡の城下絵図を眺めて」大書中学社会 No. 88，４～６頁，1973年２月

［のち，著書13，第三部第二章(一)］

58 「米沢城下絵図について――地図史的考察の試み――」史林　第56巻第２号，145～163頁，1973年３月

［のち，一部が著書13，第一部第三章(三)。更に日本古文書学会編『日本古文書学論集11　近世Ⅰ』吉川弘文館，228～258頁，1987年４月にも再録］

59 「都市史の自然環境」大書中学社会 No. 89，１～４頁，1973年４月

60 「古刊町絵図大概――都市史ノートⅠ」地理　第18巻第10号，99～107頁，1973年10月

［のち，著書13，第一部第四章(一)］

61 「京都・江戸版図史の概略――都市史ノートⅡ」地理　第18巻第11号，102～119頁，1973年11月

［のち，著書13，第一部第四章(二)(三)］

62 「大阪史の自然地理的基礎」，宮本又次編『大阪の歴史と風土（毎日放送文化双書１）』毎日放送，２～53頁，1973年11月

63 「明暦江戸実測図と寛文五枚図との間――都市史ノートⅢ」地理　第18巻第12号，92～99頁，1973年12月

［のち，著書13，第一部第二章(二)］

64 「遠近道印をめぐって――都市史ノートⅣ」地理　第19巻第１号，114～121頁，1974年１月

［のち，著書13，第一部第二章(三)］

65 「平安京プランの変容過程――都市史ノートⅤ」地理　第19巻第２号，114～121頁，1974年２月

[のち，著書13，第二部第一章(二)の一部]

66 「京都の近世都市化について——都市史ノートⅥ」地理　第19巻第3号，108～115頁，1974年3月

[のち，著書13，第二部第一章(二)の一部と(三)]

67 「都市図屏風の世界——都市史ノートⅦ」地理　第19巻第4号，72～82頁，1974年4月

[のち，著書13，第一部第一章(一)(二)(四)]

68 「城下町からみた城郭考」歴史読本　第19巻第10号　48～55頁，1974年8月

[のち，著書21，第Ⅰ部第二章]

69 「古地図に描かれた大阪」，宮本又次責任編集『難波大阪　第一巻　歴史と文化』講談社，25～64頁，1975年11月

[のち，一部は著書20，第Ⅳ部第一章の一部。また著書22，第Ⅱ部第二章第4節の一部]

70 「総論」・「(近畿の) 都市」・「(中部の) 政治的領域」・「(中部の) 都市」，藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説　近世編』吉川弘文館，2～9頁，137～146頁，196～198頁，198～203頁，1977年4月

[「総論」を補充・改変したものが，先に著書9，総説第二。「(近畿の) 都市」は，のち著書21，第Ⅱ部第一章の一部]

71 「(中部の) 都市」，藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説　近代編』」吉川弘文館，181～190頁，1977年5月

[先に，著書10，第2編第2章]

72 「古松軒の城郭・城下比較論」歴史読本　臨時増刊号 (新人物往来社)，212～223頁，1977年6月

[のち，著書20，第Ⅱ部第三章]

73 「近江の板行国絵図と名所図会」近江地方史研究　第6号，1～8頁，1977年12月

74 「山陰道諸藩の城下町プラン」，日本アートセンター編『探訪日本の城　第7巻　山陰道』小学館，164～166頁，1978年1月

75 「リューベックの都市景観図」ちくま No. 106，10～13頁，1978年2月

76 「中央山地帯の城下町プラン」，相賀徹夫編『探訪日本の城　第4巻　中山道』小学館，160～163頁，1978年2月

77 「福井城下絵図史について」，藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究(上)』大明堂，238～247頁，1978年4月

78 「近世城下町プランの基本」，相賀徹夫編『探訪日本の城　別巻　築城の歴史』小学館，173～180頁，1978年7月

[のち，著書21，第Ⅰ部第一章の一部]

79 「京の一覧図について」月刊古地図研究　第9巻7号，2～12頁，1978年9月
［のち，著書20，第Ⅲ部第二章］

80 「『増修改正摂州大阪地図』に関する覚書」，日本地図資料協会編『古地図研究』（月刊古地図研究百号記念論集），299～309頁，1978年12月
［のち，著書20，第Ⅲ部第三章の一部］

81 「『御次御用金沢十九枚御絵図』とその作成過程について」人文地理　第31巻第1号，77～88頁，1979年2月

82 「金沢城下絵図史について」史林　第62巻第3号，111～134頁，1979年5月
［のち，編著31の別冊『城下町金沢の都市空間論』の一部］

83 「旧城下町域の地名について――近世の地名――」歴史百科　第5号（「日本地名事典」）新人物往来社，82～87頁，1979年5月

84 「歴史地理学からみた決戦場――道中記録で綴る関ヶ原の地域史――」歴史と人物（中央公論社）1979年10月号（特集『関ヶ原の合戦』），130～135頁，1979年10月
［のち，著書20，第Ⅱ部第二章］

85 「幕府へ提出の城下絵図について」待兼山論叢（日本学篇）第13号，1～16頁，1980年1月

86 「近世（3）―干拓新田の地域的展開―」・「近世（4）―干拓新田の諸問題―」，松井武敏監修・編（愛知県開拓史研究会編）『愛知県開拓史　通史編』愛知県，96～110頁，110～126頁，1980年3月

87 L'espace dans la cartographie japonaise ancienne, "*L'Espace Géographique*", *n*°. 2, p. 95～104, 1980.（高橋正と共著，矢守一彦の執筆は p. 95, p. 100～104）
［のち，元の日本文を著書22，第Ⅱ部第二章第4節の一部］

88 Maps and Bird's-eye Views of Castle Towns in the Edo Period, Geography Institute, Kyoto University (ed.) *Geographical Languages in Different Times and Places; Japanese Contributions to the History of Geographical Thoughts,* Kyoto, p. 48～51, 1980.

89 「自然と景観」，林屋辰三郎・飛鳥井雅道・森谷尅久編『新修大津市史　第四巻　近世後期』大津市役所，6～20頁，1981年7月

90 「城下町――旅人の視座からの城下町論」，別冊るるぶ愛蔵版10『城と城下町の旅』日本交通公社出版事業局，171～175頁，1981年9月

91 「近世城下町の空間構造――とくに町割の基軸について――」歴史公論　第8巻第6号，46～53頁，1982年6月
［のち，著書21，第Ⅰ部第三章の一部］

92 「風景描写と古地図」泉　第37号，64～67頁，1982年８月
［のち，著書20，第Ⅰ部第三章の一部］
93 「遠近道印についての新解釈――有沢文書等との関連において――」日本海地域史研究第４輯，37～57頁，1982年９月
94 「大津の町絵図について――南波氏所蔵図を中心に――」近江地方史研究　第15・16合併号，１～12頁，1982年10月
95 「鳥瞰図考」，京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，168～178頁，1982年10月
［のち，著書20，第Ⅰ部第二章の一部］
96 「有沢永貞――ある兵学者の生涯――」，田中喜男編『風のあしおと――近世加越能の群像』静山社，68～79頁，1982年12月
［のち，著書20，第Ⅳ部第二章の一部］
97 「絵と地図の狭間」地図情報，Vol. 2 No. 3，14～17頁，1983年１月
［のち，著書20，第Ⅰ部第一章の一部］
98 「石黒信由以前のカルトグラフィー」，楠瀬勝（研究代表者）編『石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究――江戸時代末期の郷紳の学問と技術の文化的社会的意義――』（トヨタ財団助成研究報告書　Ⅲ-017），57～62頁，1983年１月
99 「城下絵図の類別――とくに藩用図について」，藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店，29～40頁，1983年10月
100 「秀吉と都市の建設――とくに土建事業を中心に――」，『河出人物読本　豊臣秀吉』河出書房新社，134～139頁，1983年10月
101 「『ニュルンベルク年代記』と都市景観図」，中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房，２～27頁，1983年11月
102 「江戸前期測量術史劄記」日本学報（大阪大学）第３号，１～35頁，1984年３月
103 「『世界都市図帳』の画法について」大阪大学文学部共同研究センター編『都市史をめぐる諸問題』（共同研究論集　第２輯），大阪大学文学部共同研究センター，114～130頁，1984年８月
104 「浪華ビジネス街独案内（ひとりあない）図」ちくま No. 162，19～21頁，1984年９月
105 「測遠五術と石黒信由の方法」，楠瀬勝（研究代表者）編『石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究――江戸時代末期の郷紳の学問と技術の文化的社会的意義――第二輯』（トヨタ財団助成研究報告書　Ⅲ-025），51～58頁，1984年11月
106 The difference between maps and landscapes : A problem of the history of maps in Japan, Keiichi Takeuti (comp. & ed.) "*Languages, paradigms and*

schools in geography: Japanese contributions to the history of geographical thoughts (2)", Laboratory of Social Geography, Hitotsubashi University p. 45～53, 1984年12月

107 「姫路城下の形成と発達――城下町の形成と変容」，加藤得二責任編集『日本名城集成　姫路城』小学館，180～194頁，1984年12月

108 「総論」，藤岡謙二郎編『講座考古地理学　第3巻　歴史的都市』学生社，11～25頁，1985年1月

［のち，一部「歴史的都市の考古学と地理学」が著書21，第Ⅰ部第一章の一部］

109 「近世関東の城下町プランについて」，細井淳志郎先生退官記念論文集出版事業会編『細井淳志郎先生退官記念論文集　地域をめぐる自然と人間との接点』細井淳志郎先生退官記念論文集出版事業会，499～506頁，1985年2月

［のち，著書21，第Ⅱ部第一章の一部］

110 「貞秀の一覧図について」學鐙 Vol. 82 No. 2, 44～47頁，1985年2月

［のち，著書22，第Ⅰ部第二章第2節の一部］

111 「解説」，原田伴彦『原田伴彦論集　第2巻　都市形態史研究』思文閣出版，385～397頁，1985年3月

112 「近世大坂地誌の方法――とくに採録項目について――」，芝哲夫編『大阪の都市文化とその産業基盤（共同研究論集　第1輯）』（文部省特定研究＜昭和59年度＞――大阪における産業都市文化の発達に関する総合的研究――），大阪大学，40～44頁，1985年7月

113 「近世大坂の地誌的情報」適塾　第18号，38～43頁，1985年12月（1984年11月26日，適塾記念講演会講演要旨）

114 「個別城下絵図史調査報告――高松・姫路」日本学報（大阪大学）第5号，79～98頁，1986年3月

115 「赤水と古松軒と地図と」，學鐙 Vol. 83 No. 11, 16～19頁，1986年11月

［のち，著者22，第Ⅰ部第三章第3節］

116 「旅行記録のあり方――赤水と古松軒をめぐって――」学士会会報　第774号，81～86頁，1987年1月

［のち，著書22，第Ⅰ部第三章第2節］

117 「古地図にみる大坂の市街地造成」，地図情報 Vol. 6 No. 4, 12～15頁，1987年3月

118 「志賀重昂――日本風景論を中心に――」，大阪大学編『大阪大学放送講座　日本研究の先達』大阪大学，151～165頁，1987年9月（日本研究の先達＜第12回＞1988年1月3日放送）

［のち，著書22，第Ⅰ部第四章］

119 「江戸・東京の地図」，小木新造・陣内秀信・竹内誠・芳賀徹・前田愛・宮田登・吉原健一郎編『江戸東京学事典』三省堂，1106～1124頁（戸沢幾子と共同執筆），1987年12月

120 「古絵図・地誌類に描かれた近世の大坂」，新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史第一巻』大阪市，126～166頁，1988年3月
［のち，一部が著書22，第Ⅱ部第二章第5節］

121 「江戸と城下町のプラン」，末尾至行・橋本征治編『人文地理――教養のための22章』大明堂，153～160頁，1988年3月

122 「地図と絵画のあいだ――蕙斎と貞秀の世界――」，『週刊朝日百科　日本の歴史　歴史の読み方1――絵画史料の読み方』朝日新聞社，24～25頁，1988年7月
［のち，著書22，第Ⅰ部第二章第1節の一部，第Ⅱ部第二章第4節の一部］

123 「地図を読む――都市景観図と村絵図」，『週刊朝日百科　日本の歴史・別冊　歴史の読み方2――都市と景観の読み方』朝日新聞社，31～34頁，1988年9月
［のち，著書22，第Ⅰ部第二章第1節の一部，第Ⅰ部第二章第2節の一部］

124 「人文地理学会創立40周年記」人文地理　第41巻第1号，1～5頁，1989年2月

125 「熊本城下絵図史について」，水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』大明堂，307～318頁，1989年7月

126 「浪華における賑いの構図」，葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー(下)』地人書房，184～201頁，1989年7月

127 「バークレー本『日本図屏風』について」福井県史しおり（『福井県史　資料編　第16巻上　絵図・地図』），1～5頁，1990年2月
［のち，著書22，第Ⅱ部第二章第3節の一部］

128 「旅行記のたのしみ」，『草津市史　第5巻』巻報5，4～8頁，1990年6月
［のち，著書22，第Ⅰ部第三章第1節］

129 「吉宗の地図好み」，學鐙 Vol. 87 No. 7，10～15頁，1990年7月
［のち，著書22，第Ⅲ部第二章］

130 「都市景観図の東西」，内田芳明・陣内秀信・三輪修三編『歴史と社会　10　都市の意味するもの』リブロポート，59～63頁，1990年9月

131 「日本の城下町プランについて」，科学研究費補助金「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」イスラムの都市性・研究報告　研究報告編，第100号，1～12頁，1991年2月（1990年10月20日，＜都市史の諸段階＞研究会報告，『都市史の諸段階――比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究』（昭和63年～平成2年度，文部省科学研究費補助金　重点領域研究「イスラムの都市性」B班＜研究代表者　今永清二＞研究成果報告書）1～16頁，1991年3月

132 「アメリカの都市景観図」文明のクロスロード Museum Kyushu　第39号，13～18頁，1991年11月

133 「御城下札ノ辻考――地域類型との関連において――」歴史地理学　第157号，43～57頁，1992年1月（のち，橋本征治<研究代表者>編『技術と地域の関連についての地理学的研究』<平成4年度　文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書>，1992年3月所収）

134 「世界図屏風――近世日本人の世界観」，朝日新聞社書籍第一編集室編『見る・読む・わかる　日本の歴史3近世』朝日新聞社，4～5頁，1992年12月

135 「キヴィタテス・オルビス・テッラールムの世界」リベルス　第17号，18～23頁，1994年9月（ただし，著書14のうちの「世界都市図帳」に関する記述の一部<17～18頁，133～134頁，185～190頁>をつなぎ合わせ表題を付して論文風に再構成したもの）

V　そ　の　他

a　短　報

1 「合衆国南東部における新しき土地利用の展開（M. プランティ）」人文地理　第5巻第5号，52～54頁，1953年12月

2 「(學界展望のうち）歴史地理」人文地理　第6巻第1号，69～73頁，1954年4月

3 「城下町建設と旧景観の破壊」人文地理　第6巻第2号，47頁，1954年6月

4 「Lautensach による日本の景観区分図式」人文地理　第6巻第6号，24頁，1955年2月

5 「明治初期の近江における農産物の商品化」人文地理　第7巻第6号，48～49頁，1956年2月

6 「『郷土調査』のレポートについて」歴史　第4号，10～11頁，1956年5月

7 「(歴史地理のうち)封建期」人文地理　第9巻第1号，68～72頁，1957年4月

8 「柏原から守山」，尾崎士郎編『東海道歴史散歩』（河出新書278）河出書房新社，145～162頁，1958年9月

9 「(学界展望のうち）歴史地理　古代・中世・近世」人文地理　第13巻第2号，95～99頁，1961年4月（押野昭生と共同執筆）

10 「城のある町にて」地理　第8巻第9号，60～61頁，1963年9月

11 「放浪記」地理　第8巻第10号，52～53頁，1963年10月

12 「五勺の酒」地理　第8巻第11号，50～51頁，1963年11月

13 「文学と風土について」地理　第8巻第12号，52～53頁，1963年12月
14 「ふたたび文学と風土について」地理　第9巻第1号，72～73頁，1964年1月
15 「卍(まんじ)」地理　第9巻第2号，62～63頁，1964年2月
16 「東パキスタン村落の土地利用」，大阪大学インド東南アジア研究センター彙報 No. 3，20～21頁，1966年3月
17 「(学界展望のうち) 歴史地理　中世」人文地理　第18巻第2号，84～85頁，1966年4月（小林健太郎と共同執筆）
18 「大名の所領高と城下町」・「人口資料」（以上，表），「都市図」・「大名配置と所領」・「人口推移」（以上，地図），藤岡謙二郎編『日本歴史地理ハンドブック（増訂版)』大明堂，122～144頁，194～202頁，307～310頁，311～312頁，315頁，1966年5月
19 「歴史地理部会（第1回～第16回)」人文地理　第19巻第2号，104頁，1967年4月
20 「アジアにおける人口増加と食糧問題＜とくにインドについて＞」大書中学社会 No. 57 4～6頁，1967年11月
21 「丹後ちりめんと浜ちりめん（特論と解説10」，織田武雄・林屋辰三郎編『日本の文化地理　第10巻　京都・滋賀』講談社，320～322頁，1968年5月（現代1975年11月号によると歴史地理や地誌も担当）
22 「都市形態の文化史」大書中学社会 No. 63，5～8頁，1968年11月
23 「城下町彦根」，藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む　第二集』大明堂，70～71頁，1970年6月
24 「本論（正確な執筆箇所不明)」，宮本又次・織田武雄編『日本の文化地理　第12巻　大阪』講談社，1970年6月
25 「近世日本の地域構造と中心集落―― 1970年度シンポジウムのメモから――」地理　第16巻第1号，84～89頁，1971年1月
26 「城下町姫路」，藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む　第三集』大明堂，56～57頁，1971年4月
27 「町絵図」，藤岡謙二郎編『地域調査ハンドブック――地理研究の基礎作業――』ナカニシヤ，75～76頁，1971年5月
28 「城下町名古屋」，藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む　第四集』大明堂，48～49頁，1972年11月
29 「城下町岡崎」・「城下町高松」，藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む　第五集』大明堂，64～65頁，76～77頁，1973年4月
30 「城下町浜松」FHG No. 32，1335～1336頁，1973年4月
31 「侏儒のことば」地理　第18巻第6号，7～8頁，1973年6月

32 「新聞小説『五彩の図絵』から」大阪大学図書館報 Vol. 7 No. 6, 1～2頁, 1974年2月

33 「シンポジウム『土地の区画』」人文地理　第26巻第1号, 113～114頁, 123～127頁, 1974年2月（小林博・浮田典良と共同執筆）

34 「膳所の城下町」FHG No. 36, 1520～1521頁, 1974年3月

35 「風土の比較」会報（国立大学協会）第69号, 147頁, 1975年9月

36 「城下絵図史研究の課題」朝日新聞（夕刊), 1975年12月3日

37 「比較文化学と地理学の関係」朝日新聞（夕刊), 1976年3月2日

38 「日本都市図カタログ――仙台・新潟・京都・広島・丸亀・佐賀・長崎――」太陽　第14巻第9号, 65～73頁, 1976年8月

39 「平壌」・「イスタンブール」, 藤岡謙二郎・谷岡武雄共編『地図にみる世界の百万都市』朝倉書店, 182～183頁, 236～241頁, 1976年10月

40 「地図の再発見」サンケイ新聞, 1976年10月4日
[のち, 著書20, 第Ⅳ部第三章の一部]

41 「近畿諸藩の城下町プラン」, 児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史　第8巻』月報11, 新人物往来社, 5～7頁, 1977年3月

42 「大阪城界隈――一枚の地図(25)」サンケイ新聞, 1977年4月10日
[のち, 著書20, 第Ⅳ部第一章の一部。また, サンケイ新聞社編『一枚の地図』PHP研究所, 126～131頁, 1978年3月に再録]

43 「山陽道　港町・城下町　カラーページ解説」・「山陽道の城下町・港町――神戸・姫路・岡山・岩国・下関――」・「改正大阪区分細見図（特別付録・本誌収録古地図解説のうち)」「大阪」(京都・大阪古地図目録のうち), 『(太陽コレクション）地図　江戸・明治・現代』第2号（京都・大阪・山陽道), 平凡社, 68～118頁, 137～141頁, 145頁, 154頁, 1977年5月（大塚隆と地図監修）
[のち,「山陽道の城下町・港町―神戸・姫路・岡山・岩国・下関―」が著書20, 第Ⅳ部第一章の一部]

44 「古地図に描かれた大阪の町」, 大阪大学編『大阪――歴史と環境――』（第9回　大阪大学開放講座), 大阪大学, 3～9頁, 1977年8月

45 「江戸時代の地図帳」中日新聞, 1977年11月11日
[のち, 著書20, 第Ⅳ部第三章の一部]

46 「古地図と記号」図書新聞　第96号, 1978年3月11日
[のち, 著書20, 第Ⅳ部第三章の一部]

47 「城下絵図の地図学史的検討」, 藤岡謙二郎（研究代表者）編『城下町とその変貌に関す

る歴史地理学的研究』（科学研究費補助金総合研究(A) 中間報告）3頁，1978年(3)月

48 「(学界展望のうち）地図〔近世以前〕」人文地理 第30巻第3号，65～66頁，1978年6月

49 「古地図へのまなざし」地図ニュース No. 103，2頁，1981年4月
[のち，著書20，第Ⅳ部第三章の一部]

50 「つまらない<発見>」大阪大学学報 No. 333，230～232頁，1981年10月
[のち，著書20，第Ⅳ部第二章の一部]

51 「遠近道印に関する新資料」朝日新聞（夕刊），1982年3月26日
[のち，著書20，第Ⅳ部第二章の一部]

52 「特定研究『都市の理念に関する比較史的研究』の概要――あとがきに代えて――」，大阪大学文学部共同研究センター編『近世都市の比較史的研究』（共同研究論集 第1輯），大阪大学文学部共同研究センター，62～66頁，1982年8月

53 「近世村落の歴史地理――『藩政村』に取り組む」読売新聞（夕刊），1982年12月10日

54 「正井泰夫：江戸の都市地域構造（大会特別発表）」人文地理 第35巻第1号，88～90頁，1983年2月

55 「大阪城天守閣の眺め」ガスニュース No. 69，15～16頁，1984年1月

56 「武蔵と明石城下の町割り」，『NHK歴史への招待』30号，46～47頁，1984年7月
[のち，日本放送協会編『NHK歴史への招待 第14巻 実像・宮本武蔵』日本放送出版協会，90～92頁，1989年10月再録]

57 「歴史地理学に新風吹き込む」サンケイ新聞，1984年10月15日（インタビュー）

58 「江戸時代すでに衛星的視野」朝日新聞（夕刊），1984年11月28日

59 「江戸日本のランドサット図」，朝日新聞（夕刊），1985年1月9日
[のち，著書22，第Ⅰ部第二章第1節の一部]

60 「『東北地方の文化と地図』展――千秋文庫」地図情報 Vol. 4 No. 4，28～29頁，1985年3月

61 「(学界展望のうち）総説」人文地理 第37巻第3号，38～39頁，1985年6月

62 「空間意識探って『心』を復元」（高橋徹担当），朝日新聞学芸部編『文化の前線――50人が考える』朝日新聞社，72～75頁，1985年10月（「空間意識探って『心』を復元――転換期の歴史学4」朝日新聞（夕刊），1984年7月23日をもとにしたもの<インタビュー>）

63 「古地図のオリエンテーション」本 第10巻12号，12～13頁，1985年12月
[のち，著書22，第Ⅱ部第一章第2節の一部]

64 「(学界展望のうち）総説」人文地理 第38巻第3号，20～21頁，1986年6月

65 「『肥前名護屋城図屏風』を読む」，『週刊朝日百科　日本の歴史』27号，朝日新聞社，158～159頁，1986年10月

66 「名所案内から商工名鑑へ」，『週刊朝日百科　日本の歴史』68号，57頁，1987年8月
［のち，著書22，第Ⅰ部第一章第2節の一部］

67 「日本の都市――城下町プランとその近代化――」，大阪大学編『都市―機能・構造と人間』（第19回大阪大学開放講座），13～21頁，1987年8月

68 「古地図への旅」ＣＥＬ（大阪ガス　エネルギー・文化研究所）第5号，43～45頁，1988年2月
［のち，著書22，第Ⅱ部第一章第1節］

69 「イマゴ・ムンディの変容過程」教室の窓――中学社会／新しい社会 No. 321，6～7頁，1988年4月
［のち，著書22，第Ⅱ部第二章第1節］

70 「眺望のたのしみ」東海地理　第21号，1頁，1988年10月

71 「地図と記号」月刊健康　第341号，30～31頁，1989年11月
［のち，著書22，第Ⅱ部第一章第2節の一部］

72 「懐徳堂と地理学」，懐徳　第58号，2～4頁，1989年12月

73 「城下町考」，「内田秀雄・高橋正隆編『都賀山』つがやま荘，115～116頁，1990年4月

74 「城とヴィスタ」，吉成勇編『日本「廃城」総覧』（別冊歴史読本・事典シリーズ第7号），新人物往来社，50～51頁，1990年6月

75 「大航海時代とメンタル・グローブ」地図ニュース No. 215，2頁，1990年8月
［のち，著書22，第Ⅱ部第二章第2節］

76 「南蛮地図屏風」オール関西　第7巻第6号，132～133頁，1990年9月
［のち，著書22，第Ⅱ部第一章第3節の一部］

77 「古地図のディレクション」大阪大学図書館報 Vol. 24 No. 2，2～4頁，1990年9月
［のち，著書22，第Ⅱ部第一章第2節の一部］

78 「(学界展望のうち)地図　近代以前」人文地理　第43巻第3号，61～62頁，1991年6月

79 「ニュルンベルク景観図について」リベルス　第0号，表紙Ⅱ，1991年10月

80 「『地図情報』誌と私」，地図情報　Vol. 11 No. 2・3，38頁，1991年10月

81 「城下絵図史総説」地図情報 Vol. 12 No. 1，4～6頁，1992年6月

82 「ジオグラフィカ・センリオカ発刊に際して」ジオグラフィカ・センリガオカ　1号，i～ii頁，1992年9月

b　書評・文献解題・推薦文

1　H. Hassmann (trans. by A. M. Leeston): Oil in the Soviet Union—History. Geography. Problems. 1953, 人文地理　第6巻第1号，77頁，1954年4月

2　Hermann Lautensach,: Der Geographische Formenwandel. Studien zur Landschaftssystematik, 史林　第38巻第3号，76～80頁，1955年5月

3　姫岡勤・藤岡謙二郎編『世界地理民族誌』人文地理　第7巻第3号，50～52頁，1955年8月

4　P. E. James, C. F. Jones: American Geography——Inventory & Prospect 人文地理　第7巻第3号，55～56頁，1955年8月

5　H. C. Darby: On the Relation of Geography and History, 1953, 人文地理　第7巻第5号，69頁，1955年12月

6　A. Stevens: The Distribution of Rural Population in Great Britain, 1946, 人文地理　第7巻第5号，78頁，1955年12月

7　S. W. E. Vince: Reflections of the Structure and Distribution of Rural Population in England and Wales, 1921-31, 1952, 人文地理　第7巻第5号，78頁，1955年12月

8　『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』史林　第40巻第1号，73～77頁，1957年1月

9　Schwarz, G.: Regionale Stadttypen im niedersächsischen Raum zwischen Weser und Elbe, 地理学評論　第34巻第7号，49～52頁，1961年7月
［のち，著書8，第1編第1章V］

10　Frederik R. Hiorns: Town Building in History, 人文地理　第13巻第4号，78～79頁，1961年8月

11　E. Kirsten: Die griechische Polis als historisch-geographisches Problem des Mittelmeerraumes, 人文地理　第13巻第4号，79頁，1961年8月

12　Historische Raumforschung I, II, 地理学評論　第34巻第9号，515～518頁，1961年9月

13　Kirsten, E.: Nordafrikanische Stadtbilder, Antike und Mittelalter in Libyen und Tunesien 人文地理　第17巻第4号，102～103頁，1965年8月

14　Günter Franz: Historische Kartographie, Forschung und Bibliogaphie, 人文地理　第19巻第6号，99～100頁，1967年12月

15　「コミュニティーの顔」，『大阪の町名』清文堂出版（1977年9月）

16　織田武雄著『古地図の世界』史林　第65巻第3号，144～146頁，1982年5月

［のち，著書20，第Ⅳ部第三章の一部］

17 「近代史のスタートライン」，元正院地誌課編纂『日本地誌提要』（復刊）臨川書店（1982年10月）

18 山澄元著『近世村落の歴史地理』日本歴史　第423号，104～105頁，1983年８月

19 川村博忠著『江戸幕府撰国絵図の研究』歴史地理学　第127号，45～47頁，1984年12月

20 「監修にあたって」，矢守一彦監修『名城絵図集成　東日本之巻』・『名城絵図集成　西日本之巻』小学館（1986年12月，編著26・27）

21 織田武雄監修・中務哲郎訳『プトレマイオス地理学』歴史地理学　第135号，36～38頁，1986年12月

22 「日本の都市計画史にとって，かけがえのない黎明期の記録」，藤森照信監修『東京都市計画資料集成　明治・大正篇』本の友社（1987年１月～1988年４月）

23 船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』日本歴史　第467号，102～105頁，1987年４月

24 「大縮尺図が連写する都市史のディテール」，『日本近代都市変遷地図集成――大阪・京都・神戸・奈良――』柏書房（1987年10月）

25 「全関西百年前の歴史地理的現実」，『明治前期関西地誌図集成』柏書房（1989年10月）

26 福井市編集・発行『福井市史　資料編別巻　絵図・地図』史林　第72巻第６号，163～166頁，1989年11月

27 「『地方の時代』を写すアトラス」，『昭和12年　大日本分縣地圖地名總覧』，昭和礼文社（1989年12月）及び『地図でみる県の移り変り　全４巻（前著を含む）』，昭和礼文社（1991年９月）

28 「風土性に染められた旅行記」，パウサニアス著，飯尾都人訳編『ギリシア記』龍渓書舎（1991年１月）

29 小野寺淳『近世河川絵図の研究』地理学評論　第64巻第10号，728～729頁，1991年10月

30 「ロンドンが倫敦だった頃」，『１万分の１　ロンドン地形図集成』柏書房（1991年12月）

31 「内なる風景の構造をさぐる　岩田慶治著『日本人の原風景』」文化会議　第278号，26～28頁，1992年８月

c　口頭発表・同要旨

1 「城下町の成立――彦根藩――」（昭和28年度人文地理学会大会，1953年11月１日，発表要旨なし）

［のち，論文１］

2 「近江における地域的分業の進展」（日本地理学会大会，1954年５月３日，発表要旨なし）

［のち，論文２］

3 「城下町研究の成果と課題」（昭和29年度人文地理学会大会シンポジウム，1954年11月３日，発表要旨なし）

［のち，論文18］

4 「近江における農民的商品生産の歴史地理学的研究――明治期を中心に」（人文地理学会第14回例会，1956年２月25日，発表要旨なし）

5 「江戸時代における紀ノ川流域の村落規模」（人文地理学会　第16回例会，1956年６月９日，発表要旨なし。論文13）

6 「城下町に関する２，３の地理学的考察」（史学研究会　２月例会＜テーマ：封建都市の諸問題＞，1958年２月１日，発表要旨なし）

［のち，論文15］

7 「近世城下町の都市計画について」（名古屋地理学会例会，1959年６月27日，発表要旨なし）

8 「朝鮮の邑城について」（人文地理学会　第47回例会，1962年６月23日），人文地理　第14巻第４号，109～110頁，1962年８月

［のち，論文24・25］

9 「大阪・名古屋の木材業の明治以降における変容過程」（昭和38年度日本地理学会・人文地理学会合同大会シンポジウム，1963年10月19日），人文地理　第15巻第６号，75頁，1963年12月

［のち，論文36］

10 「（幕藩領の地域的研究のために――文献展望のうち）藩政期」（人文地理学会　第１回歴史地理部会，1963年９月28日），人文地理　第19巻第２号，105頁，1967年４月

11 「ドイツ中世都市の空間的構成――核と殻の間――」（人文地理学会　第80回例会，1969年２月８日），人文地理第21巻第１号，110～111頁，1969年２月

12 「ドイツにおける都市図発達の概略」（人文地理学会　第８回地理学史部会，1971年１月23日），人文地理　第23巻第１号，108～110頁，1971年２月

［のち，著書８，第１編第２章］

13 「城下絵図の研究」（人文地理学会　第97回例会　1972年６月10日），人文地理　第24巻第５号，97～99頁，1972年10月

［のち，これをもとに著書20，第Ｉ部第一章の一部書き下し］

14 「都市建設の歴史と環境」（第４回大阪大学開放講座，1972年10月20日，発表要旨なし）

15 「都市プランと比較文化」（福井県地理学会　昭和49年度秋季講演会，1974年11月14日，発表要旨なし）

16 「古地図に描かれた大阪の町」（第9回大阪大学開放講座，1977年9月16日，短報44）

17 「都市の景観図について」（人文地理学会　第150回例会，1983年6月11日），人文地理　第35巻第4号，86～87頁，1983年8月

18 「歴史を地図で読む――古地図の魅力――」，第66回朝日ゼミナール資料，4頁，1984年6月

19 「『絵本浪花のながめ』の世界」（人文地理学会　1984年度大会，1984年11月18日），人文地理　第37巻第1号，91～93頁，1985年2月

20 「近世大坂の地誌的情報」（適塾記念講演会，1984年11月26日。論文113）

21 「日本の都市――城下町プランとその近代化――」（第19回大阪大学開放講座，1987年9月22日。短報67）

22 「志賀重昂――日本風景論を中心に――」（大阪大学放送講座　日本研究の先達　第12回，1988年1月3日。論文118）
［のち，著書22，第Ⅰ部第四章］

23 「道中図と旅行記」ふるさと創生・第19回滋賀県芸術祭参加『東海道五十三次と草津――浮世絵の世界――』記念講演会，資料2枚，1989年10月

24 「城下町考」，内田秀雄・高橋正隆編『都賀山』つがやま市民教養文化講座，つがやま荘，115～116頁，1990年4月

25 「城下図と城下町の読み方」（人文地理学会　第185回例会，1990年6月16日），人文地理　第42巻第4号，77頁，1990年8月
［のち，編著31の一部「城下町の空間構造とコスモロジー――『金沢古蹟史を読む』――」］

26 「日本の城下町プランについて」（重点領域研究「イスラムの都市性」B班研究会，1990年10月20日。
［のち，論文131］

27 「御城下札ノ辻考――地域類型との関連において――」（歴史地理学会　第34回大会・総会，1991年6月2日。歴史地理学　第155号，61～62頁，1991年9月）
［のち，論文133］

d　事　典

1 「淡路」・「伊賀」・「和泉」・「伊勢」・「伊勢志摩国立公園」・「伊勢湾」・「近江」・「大阪湾」・「河内」・「紀伊」・「紀伊水道」・「紀州街道」・「紀淡海峡」・「熊野川」・「熊野灘」・「志摩」・「摂津」・「但馬」・「丹後」・「丹波」・「播磨」・「山城」・「大和」・「大和川」・「吉野熊野国立公園」，渡辺光監修『日本地名事典　第二巻』，朝倉書店，522～531頁，533～539頁，543頁，545頁，547～549

2 「都市図の東西」，板垣雄三・後藤明編『事典イスラームの都市性』亜紀書房，64～65頁，1992年5月

頁，553～554頁，559～564頁，1955年5月（熊野川は藪内芳彦と共著）

e　文部省科学研究費報告書（矢守が研究代表者のもの）

1 『国絵図の地図学史的・歴史地理学的研究』（昭和51・52年度科学研究費補助金＜一般研究B＞研究報告書），1978年（3月）

＜研究成果（1～4頁）と著書16，編著12(のうち「幕府撰国絵図と板行諸国図」)，論文73の複製の合刻＞

2 『江戸時代の地方図作成に関する地理学史的研究』（昭和57年度科学研究費補助金＜一般研究C＞研究成果報告書），1983年3月

＜研究成果（1～13頁）と編著18(のうち「浅野文庫蔵『諸国古城之図』について」)，21(のうち「浅野文庫蔵『諸国当城之図』について」)，論文93，94複製の合刻＞

3 『個別城下絵図史の調査とその比較研究』（昭和60年度科学研究費補助金＜一般研究C＞研究成果報告書），1986年4月

＜研究成果（1～8頁）と論文102，114，125複製の合刻＞

f　文　　芸

1 「朝鮮海峡」滋賀文学会『第1回滋賀県文芸コンクール1951』，2～28頁，1952年1月

2 「私の浄瑠璃坂仇討1」れいえん（東洋レーヨン株式会社滋賀工場社内誌）第127号，26～27頁，1958年7月

3 「私の浄瑠璃坂仇討2」れいえん（東洋レーヨン株式会社滋賀工場社内誌）第128号，26～27頁，1958年8月

4 「私の浄瑠璃坂仇討3」れいえん（東洋レーヨン株式会社滋賀工場社内誌）第129号，26～28頁，1958年9月

5 「F先生からの借金――知られじ，忘れじの記――」CONTOUR（京都大学地理同好会会報）15，9～10頁，1966年1月

6 「ふるさとへの挽歌」現代　1975年11月号，52～53頁，1975年11月

7 「和文英訳紀行」FHG No. 63, 2757頁，1981年1月

8 「手袋を脱ぐとき」FHG No. 70, 3083頁，1982年10月

9 「夏の思い出」海峡　第15号，42～43頁，1983年1月

10 「過ぎ去りし日々」千里地理通信　第10号，12頁，1983年12月

11 「電話と手紙」，野外歴史地理学研究会編『追憶・藤岡謙二郎先生』野外歴史地理学研究

会，222頁，1986年5月

12 「読書のたのしみ」大阪大学図書館報 Vol. 21 No. 1，1～2頁，1987年4月

13 「歴史と私」月刊歴史手帖　第16巻8号，3頁，1988年8月

14 「思い出さざるの記」，日本地図資料協会編『室賀信夫先生追悼文集』日本地図資料協会，64～65頁，1988年12月

15 「序」，大阪大学附属図書館編『大阪大学附属図書館蔵　和古書目録第一稿』大阪大学附属図書館，1頁，1989年5月

16 「新任にあたって　最近スピーチ集」千里地理通信　第23号，2頁，1990年10月

17 「大阪弁変換ソフト」千里地理通信　第25号，12頁，1991年7月

矢守一彦博士略年譜

昭和２年10月16日	朝鮮大邱府に矢守正一・美驥尾の二男として出生
昭和15年３月	大邱公立本町尋常小学校卒業
昭和15年４月	大邱公立中学校入学
昭和19年３月	大邱公立中学校修了
昭和19年４月	京城帝国大学予科理科乙類(医学部予科)入学
昭和20年11月	朝鮮より帰国
昭和21年５月	第四高等学校理科乙類第２学年編入学
昭和23年３月	第四高等学校卒業
昭和23年６月	彦根市立南中学校教諭（昭和25年３月依願退職）
昭和25年４月	京都大学文学部史学科入学
昭和28年３月	京都大学文学部卒業（史学科地理学専攻）
昭和28年４月	京都大学大学院入学（文部省研究奨学生）
昭和28年５月	滋賀県立彦根東高等学校講師（昭和29年３月依願退職）
昭和30年９月	滋賀県立長浜東高等学校教諭（昭和31年３月依願退職）
昭和33年３月	京都大学大学院修了
昭和33年４月	名古屋大学助手文学部（採用）
昭和35年５月	武藤多紀子と結婚
昭和37年４月	大阪大学講師文学部（昇任）
昭和37年11月	人文地理学会評議員（昭和43年10月まで）
昭和41年１月	大阪大学助教授文学部（昇任）
昭和41年４月	歴史地理学会評議員（平成４年８月まで）
昭和43年１月	DAAD（ドイツ学術交流会）の招きにより西ドイツほかで研究（昭和43年８月まで）
昭和45年11月	人文地理学会評議員（昭和49年10月まで）
昭和46年５月	文学博士の学位授与（京都大学）　論題「都市プランの歴史地理」
昭和50年４月	大阪大学教授文学部（昇任）
昭和51年４月	史学研究会理事・評議員（平成３年６月まで）
昭和53年11月	人文地理学会評議員（昭和57年10月まで）
昭和55年７月	大阪市総合計画審議会専門委員（昭和61年６月まで）
昭和56年６月	大阪大学評議員（平成２年３月まで）

昭和57年１月	新修大阪市史編纂委員会委員（平成４年８月まで）
昭和59年11月	人文地理学会理事・評議員（昭和63年10月まで）
昭和60年１月	日本国際地図学会評議員（平成４年８月まで）
昭和60年７月	日本学術会議人文地理学研究連絡委員会委員（昭和63年７月まで）
昭和60年７月	日本学術会議地図学研究連絡委員会委員（昭和63年７月まで）
昭和60年８月	カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館蔵，三井文庫旧蔵古地図目録作成指導総括責任者（昭和60年９月まで）
昭和61年３月	カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館蔵，三井文庫旧蔵古地図目録作成指導総括責任者（昭和61年３月まで）
昭和61年８月	カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館蔵，三井文庫旧蔵古地図目録作成指導総括責任者（昭和61年９月まで）
昭和62年４月	大阪大学附属図書館長・評議員（平成２年３月まで）
昭和63年１月	国際日本文化研究センター共同研究員（平成２年３月まで）
昭和63年４月	日本地理学会評議員（平成４年８月まで）
昭和63年８月	日本学術会議人文地理学研究連絡委員会委員（平成３年８月まで）
昭和63年９月	日本学術会議地図学研究連絡委員会委員（平成３年９月まで）
昭和63年11月	人文地理学会会長（平成４年８月まで）
平成２年４月	大阪大学名誉教授
平成２年４月	関西大学教授文学部（平成４年８月まで）
平成３年４月	関西大学東西学術研究所研究員（平成４年８月まで）
平成３年７月	日本学術会議会員（平成４年８月まで）
平成３年７月	日本学術会議人文地理学研究連絡委員会委員（平成４年８月まで）
平成３年９月	日本学術会議地図学研究連絡委員会委員（平成４年８月まで）
平成４年８月３日	肺癌のため逝去，享年65歳
平成４年８月３日	勲三等旭日中綬章授与